

337

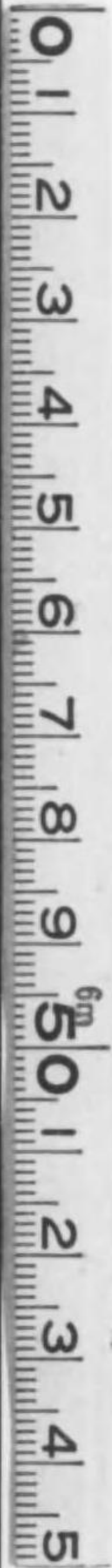
337-473



1200501394708

73

周防國熊毛郡 昭和二年十月
上代遺蹟遺物發見地調查報告書



始



正誤表

頁行	誤	正
第一圖版	熊毛郡遺跡	熊毛郡遺跡
第十八圖版	圓墳	圓墳
同	御藏口	御藏戸
第十九圖版	御藏口	御藏戸
五一頁七行	城南大字	城南村大字
圖版中ノ擲ハ	擲ノ誤ナリ	

山口高等學校囑託

弘津史文編

周防國
熊毛郡

上代遺蹟遺物發見地調查報告書

昭和二年十月

山口高等學校歷史教室發行



周防國熊毛郡上代遺蹟遺物發見地

調查報告書



337-473

目次

- (一) 古墳築造年代に就て
- (二) 國造本紀
- (三) 周防長門兩國國造
- (四) 上代遺蹟遺物調査の概要
- (五) 周防國熊毛郡上代遺蹟遺物發見地調査報告書
- (六) 遺蹟遺物の説明
- (七) 圖版

周防國熊毛郡上代遺蹟遺物發見地調査報告書目次

(一) 平生町大字佐木小字西分清水の圓墳……………二二
 (二) 室積町字西ノ庄小字ゲンベイ山の圓墳……………二二
 (三) 室積町字岩屋丸山の圓墳……………二三
 (四) 伊保庄村字上八小字宮田第五千二百九十二番畑地の圓墳……………二四
 (五) 伊保庄村字向田小字尾尻の圓墳……………二四
 (六) 伊保庄村字中村小字開作八幡山頂の双墳……………二五
 (七) 伊保庄村字和田石の圓墳……………一六
 (八) 阿月村字妻崎七二三ノ田地の圓墳……………一七
 (九) 阿月村字小田沖……………一八
 (一〇) 上關村字四代の圓墳……………一八
 (一一) 佐賀村字百濟部小字阿多田嶋の前方後圓墳……………一九
 (一二) 佐賀村大字佐賀小字森ノ下白鳥神社々地の前方後圓墳……………二〇
 (一三) 三輪村字大方の圓墳……………二一
 (一四) 大野村字南字丸山の圓墳……………二一
 (一五) 大野村字北村小字馬出の石器時代遺物包含地……………二二
 (一六) 大野村字北村小字宮畑の圓墳……………二二
 (一七) 大野村大字南村小字宮原山林の圓墳……………二三

(一八) 大野村大字南村小字東前寺の圓墳……………二四
 (一九) 麻郷村大字麻郷字鳥越小字藤尾山の圓墳……………二五
 (二〇) 麻郷村大字麻郷字鳥越山の圓墳……………二六
 (二一) 田布施町大字大波野字天皇原小字納藏の圓墳……………二六
 (二二) 田布施町大字大波野上彌ヶ迫の圓墳……………二七
 (二三) 田布施町大字波野字御藏戸小字キツネビラの圓墳……………二七
 (二四) 田布施町大字波野字御藏戸小字力善の圓墳……………三〇
 (二五) 田布施町大字波野字御藏戸の圓墳……………三一
 (二六) 田布施町大字上田布施小南兵の石器時代遺物包含地……………三二
 (二七) 田布施町大字大波野字明地の石器時代遺物包含地……………三三
 (二八) 田布施町大字大波野字ツボン天王山の圓墳……………三四
 (二九) 鹽田村字城の圓墳……………三五
 (三〇) 城南村大字宿井字吉井小字ヤクジンの圓墳……………三六
 (三一) 城南村大字宿井小字後井寺山の圓墳……………三七
 (三二) 城南村大字川西字石走の圓墳……………四三
 (三三) 周防村字小周防小字道場門前の石器時代遺物包含地……………四五
 (三四) 周防村字立野長徳寺の圓墳……………四五
 (三五) 嶋田村字宮ノ尾の圓墳……………四五
 (三六) 三丘村字吉田の圓墳……………四六

三七 勝間村大字大河内小字木舟の圓墳…………… 四七
 三八 入代村字魚切の圓墳…………… 四八

圖版目次

周防國熊毛郡と其附近地圖…………… (一)
 佐賀村白鳥神社々地古墳遠景…………… (二)
 全上 古墳發掘 巴形銅器…………… (三)
 全上 古墳發掘 獸帶鏡…………… (四)
 全上 古墳發掘 神獸鏡…………… (五)
 城南村小字後井古墳發掘介殼入甕瓮…………… (六)
 全上 古墳發掘 玉類…………… (七)
 全上 古墳發掘 鐔…………… (八)
 全上 古墳發掘 鎌(1)…………… (九)
 田布施町字御藏戸古墳發掘 鎌(2)…………… (九)
 城南村小字後井古墳發掘 吸埴(1)(3)…………… (一〇)
 全村字吉井古墳發掘 埴(2)…………… (一〇)
 田布施町小字御藏戸古墳發掘 臺附埴(1)…………… (一一)
 城南村小字後井古墳發掘 臺附埴(2)…………… (一一)
 全上 古墳發掘 雲珠…………… (一二)
 城南村小字御藏戸古墳發掘 鐵鏃…………… (一三)
 田布施町小字奥之坊發掘 彌生式土器…………… (一四)

- 城南村小字後井古墳發掘(1)(2)高坏……………(一五)
- 田布施町字御藏戸古墳發掘……………高坏……………(一五)
- 田布施町小字忍津古墳發掘(1)埴形土器……………(一六)
- 全上 字御藏戸古墳發掘(2)埴形土器……………(一六)
- 城南村小字後井古墳發掘(3)(4)埴形土器……………(一六)
- 田布施町小字忍津發掘(1)磨製石斧……………(一七)
- 全上 小字明地發掘(2)磨製石斧……………(一七)
- 周防村小字道場門前發掘(3)石庖丁……………(一七)
- 田布施町小字御藏戸圓墳、遺物位置見取圖……………(一八)
- 全上 小字力善古墳、遺物位置見取圖……………(一九)
- 城南村小字後井古墳、遺物位置見取圖……………(二〇)

古墳築造年代に就て



古墳は何時時代に盛んに築造せられしか、前方後圓墳の隆盛期は應神仁德前後で河内國南河内郡道明寺村大字國府にある應神天皇陵は周圍兆域千八百八十六間二重周滄で陵丘高二百二十五間後圓部の徑百三十三間ある和泉國泉北郡向井村大字中筋の仁德天皇陵は周圍兆域千五百十間三重周滄で陵丘高二百七十間後圓部の徑百三十六間であるされどもすでに開化天皇の時代にも前方後墳は明らかになり大和國奈良市油坂町字山ノ寺にある同天皇の御陵は周圍兆域三百六十間で明らかに前方後圓墳である其の衰退期は敏達天皇時代の河内國磯長村大字太子にある同天皇陵は周圍兆域百九十六間でありその以後は圓墳制となり石槨の發達によつて内部の嚴密を加ふるに共に前代に見る如き偉大なる土工的墳墓の漸く減少せるものである。

されど上古に於て圓墳と前方後圓墳は併用せられしものなるべし圓墳の盛んに作られしは敏達より推古時代なるべく現に南河内獻福寺に在る御生前の築造と傳ふる聖德太子の御墓も此制を取りて造られしものである。

而れば我が防長に於ける古墳は如何なる人のものなるか前方後圓の大墳は

國造のものであらうと思はる。國造は成務天皇（一千七百九十數年以前）の五年九月國縣を増置し且は山河を以て國境縣境を分ち縦横の道を以て邑里の境を劃したまひまた大國小國の國造を定め大縣小縣の縣主を任じまた稻置（古への邑長）を定め此等の者にはいづれも楯矛を賜ひて其表を爲し給へりこの時に定め給へる國凡そ六十三にて神武天皇以來建つるころの國を合すれば總て九十一國はなれりと云ふまた別君の領するころこの間に點在せり。

別君（ワケノキミ）

景行天皇は八坂入姫を妃ごなし七男六女を生しめ給ふ第一は稚足彦尊にして後に成務天皇ご號したまへる御方である。この外妃數人ましまし皇子皇女八十人ありその中にて宮中に留まり給へる御方々即小碓皇子、稚足彦皇子、五百城入彦皇子を除き其外七十餘子はみな國郡に封じて悉く國造または別君稻置、縣主、などを賜ひ各その任地に赴かしたまひし故諸國の別など稱する者に此王の苗裔が多いすべて皇子の後裔を某の君その別ご號ひ各々その領地に居住ひて頗る威稜ありいづれも京都に出で、奉仕するご無し。

君に對して天皇を大君ご云ふもこれより始まりしものにて我が防長にも此の時代に國造を置かれた事ご思はるそれは左記の記事を見るも明らかである。

景行天皇即位の十二年秋七月、日向の熊襲叛きて朝貢をたてまつらず此によりて八月十五日天皇筑紫に幸したまふ。

九月五日周防の國の佐波郡佐波（今の三田尻附近）に到りたまひ南の方を眺望みたまふに遙に烟氣の繁く起ち上るを見そなはしかならず兇賊の多く其處に住居する者あるなるべしこのたまひ此の處に留りまします、やがて多くの臣の先祖なる武諸木、國前臣の先祖なる。菟名手、物部君の先祖にあたる夏花等をつかはして其の狀を察せしめ給ふ爰に神夏磁媛ご云ふ女子ありてこの國の魁師なり、その徒衆いご多かりしが此の女子天皇の御使いたりぬるを聽きて磁津山の賢木を抜きて上の枝に入握の劍を掛け中の枝には八咫鏡を掛け下の枝には八尺瓊を掛けまた素幡を船の舳に掛けてなびかし降參の狀を表はし參向し恭しく天皇の御前に啓し云々ご王朝上代史にあり之れによりてもすでに我が防長が景行天皇時代（一千八百六十數年以前）に大和朝廷の支配下にあつた事は知らるべきである。

國造本紀

天津彥根命(天照大神ノ御子)

河内國造

(奈良朝ヨリ二字ニ制シ河内國造以下之ニ準ス)

山城國造

道ノ口岐閉國造

道ノ奧菊多國造

石背國造

周防國造

(初代周防國造ノ父ハ神功皇后ノ御供ニテ朝鮮征伐ニ行ク)

師長國造

馬來田國造

須惠國造

周防、長門兩國國造

大嶋國造 和名抄云周防國大島郡

波久岐國造

周防國造 周防國熊毛郡周防郷又云國府在佐波郡

都怒國造 周防國都濃郡都濃郷

穴門國造 長門國國府在豐浦郷

阿武國造 長門國阿武郡阿武郷

上代遺蹟遺物調査の概要

六

周防國熊毛郡は面積凡十六方里（海島二方里）二十六ヶ町村よりなつて居る小郡である。

元正天皇の時本郡を割き玖珂郡を置かる此の地は上古の周防國で國造本紀に周防、大島、都怒、の三國を並び擧げたるは即ちこれであるまた近年本郡鹽田村岩城山に於て列石（神護石の研究は別に報告なす事さす）を發見されて居る事は如何に本郡が上古より開け居たるかを知る事が出来ること、に上古の周防國に於ける遺蹟遺物を調査しその文化の一端を明らかにし以て郷土史研究の資に供せんとするものである。

本郡内に於ける上代遺蹟遺物發見地を六十數ヶ所調査し之れを列記せしのみである。その多くは原史時代の圓形墳で稀れに前方後圓墳があるまた先史時代の遺物包含地數ヶ所をも調査したに過ぎない本郡内先史時代遺物はいづれも彌生式でまだ繩文式のものも發見せられない。

本書に於て城南村及び田布施村に於ける古墳内部の遺物配列圖は好參考資料と思はるゝものである。

本郡内に於ける石槨内、棺の置位に二種あつた事はこの調査によつて明らかである。城南村後井の圓墳の如く玉類の發見せられた位置左方に縦に棺を置かれたものと思はるゝまた納藏の古墳の如きは奥壁に近く一段横に高さ所を作りあり之れは横に棺を安置したるものである。

また本郡内に於ては大墳忽ち前方後圓墳はいづれも海岸より數町の所にある事は注意すべき事である。佐賀村白鳥並に阿多嶋に於ける如きこれであるまた周防國に於てもいづれも海岸に近く大墳を築造されて居る例へば前記佐賀村、都濃郡下松宮ノ洲、玖珂郡柳井町水口、佐波郡防府町三田尻車塚等は此の例である。

玖珂郡字柳井字水口茶白山第三百五番地山林にある前方後圓の古墳は前記佐賀村の古墳とあまり遠からざるものであり後圓部東北十七間四尺後圓部高三間三尺前方部高一間葺石埴輪は圓筒と共に埴物破片を發見して居る、明治二十五年二月四日大鏡一面小鏡四面鐵器土器陶器銅器等を發見せられ大鏡は變形神獸鏡で徑一尺四寸八分小鏡は變形四神四獸鏡で徑七寸六分此の二面は東京帝室博物館の所藏品である外に一面内行花紋鏡は徑六寸九分柳井町森田愛輔氏の所藏品で一面は繪模様式神獸鏡で元故平野雄也氏の所

七

蔵品で今は大典記念山口縣立教育博物館に陳列してある此の古鏡発見の大鏡は日本に於ける最大のものと言はれて居る。上古周防の文化を知るに十分と思はる、遺品である。

都濃郡下松町字宮ノ洲埴常社々地は今埴形を知られざれども此の地に大埴ありしもの、如く漢式鏡四面を出して居る此の地は天和二年下松磯部家祖先好介氏が宮ノ洲鹽田を開作するに當り此の附近より鏡四面を發掘して現今の地に納めたもので之れを明治初年再び發掘せられたるもので古鏡は始めより同一古埴に入れられたものでは無いのである。

此の鏡は(一)三角縁四獸鏡で怪獸を表はして居る銘文を解讀すること。

王氏作竟 四夷服 多賀國家 人民息胡虜 殄滅天下復 風雨時節

五穀 長保二親天力。

(二)三角縁四神四獸鏡直徑七寸八分。(三)獸帶四神四乳鏡直徑七寸四分。

(四)内行花紋鏡直徑三寸二分いづれも青鏽を生じ全體に亘り風化甚だしいものである。これ等は漢末三國時代に當つべきものと言はれて居る、今此の四面の古鏡は大典記念山口縣立教育博物館に陳列されてある。

また都濃郡富田町竹嶋字御家老屋敷古埴はその埴形明らかでないが明治二

十一年二月古鏡三面環頭劍一本太刀二本新一個銅鏃二十六本外玉類と件出して居る現今福川町藤井六郎氏の所藏に係る。

(一)四神四獸鏡直徑七寸四分(二)畫像鏡直徑五寸八分(三)神獸鏡直徑七寸四分のものである。

佐波郡防府町大字三田尻桑山の古埴からは天明五年、鏡二面刀三本槍尖五個鈴一個環二個刀若干靴二個紙片陶器では臺附埴二個高坏二個玉類では硝子製丸玉百個管玉十個で石棺も有つたこの事である。同郡西浦村男山古埴からは徑三寸の獸首鏡が出て居る佐波郡防府町大字三田尻村字妙見第千四百六十七番地宅地にある古埴はその埴形完全に近きもので前方部を西北に向く前方西北百二十尺西南全長百八十尺前方部高十五尺後圓部高十七尺にて前方部と後圓部に石槨を有する珍しい古埴である防府町大字東佐波令字鑄物師第三百七十二番地原野にも大なる前方後圓埴の石槨があるその入口を南方に向け全長三十六尺復室式のもので玄室高十一尺八寸幅九尺第二室高八尺幅六尺五寸羨道高七尺二寸幅三尺五寸ある。

佐波郡右田村大字高井字大日第三十九番ノ一墓地にも前方後圓埴がある入口を南にして石槨の全長五十一尺入口幅七尺高四尺二寸玄室幅七尺高八尺

で玄室は後圓部にありその内部に箱形の石棺が縦に安置してある此の附近
 字片山小字山下から銀製の馬具と雲珠杏葉と金環が出て居る。
 また今は山の奥となつて居るが古墳築造當時は海岸であつたと思はる、吉
 敷郡山口町大字下野令字赤妻の古墳から明治三十年四月組合せの石棺が
 發掘せられ内部から人骨鏡（四獸鏡直徑四寸三分）玉、鎧枚、鉞、鏃、巴
 形銅器が發見せられまた同所から明治四十一年八月船形石槨一個を發掘せ
 られてその内部からは朱の着いた拳大の自然石四個人骨鏡三面（一）位至三
 公鏡直徑三寸八分、（二）半肉刻式獸首鏡直徑三寸五分、（三）内行花紋鏡直
 徑二寸六分、環珩の曲玉二個（一）長九分（二）長八分、瑪瑙曲玉十個、（一）
 長一寸四分（二）八分等、白玉切子玉薄鼠色の楕圓形の玉其他鐵器漆器等で
 ある此の古墳盛土地中から埴輪人形の首が二個出て居るまた貝で作つた貝
 環とは異なつた圓穴のあるものと櫛（大十枚小十六枚）（一）堅一寸二分横
 一寸（二）堅五分横六分、のものが出た事は珍とすべきである。また明治二
 十三年山口町茶白山から多くの遺物と共に銅鉞（長七寸三分）が石槨の外
 部から發掘されたにもかゝらず鉞の柄の篋入部に木質の柄が残つて居た。
 以上は周防部であるがまた長門國からも貴重の遺物を發見せられて居る。

大津郡菱海村大字河原龜山古墳から四獸鏡が發見せられ豊浦郡豊田西下村
 字綾木小字上の山古墳からは六鈴鏡が發見されて居る豊浦郡安岡大字富任
 字梶栗濱からは三鈕鏡（直徑三寸）と銅劍が發見されて居る事は學界に周
 知せられて居る。
 大津郡深川村東深川給塚四九三九山林からは素文鏡（直徑一寸三分）銅製
 壺鐙銅鈴金銅製圭頭太刀、同頭椎太刀の外陶器土器、銅鈴等が發見せられ
 て居る。
 厚狹郡厚狹町西下津の古墳からは四神四獸鏡直徑七寸のもの三面と内行花
 紋鏡一面胡州鏡一面歛形石等が發見せられて居る。
 これ等の遺物については後日詳細にその郡別として記す事にする今はその
 概要のみを記す。

著 者 記 す

昭和二年六月下旬

周防國熊毛郡上代遺蹟遺物發見地
調査報告書

二

(一)平生町大字宇佐木小字西分清水

圓墳

大正十三年十月の發掘で石槨入口は東南向とし羨道と玄室の區別なく全長八尺幅四尺五寸にてその遺物としては高坏一個坏八個埴二個と素焼の蓋坏一個である同地の清水文雄氏の保存せらるゝものはそれである。同字宇佐木小字山田にも明治初年に發掘されたものあり、刀、土器を發見せし由であるまた同字上殿にも同時代に發掘せられたものがある。平生町大字堅ヶ濱字津和にも同時代に發掘せられた一圓墳がある。大正六年三月余は同地で直刀の斷片を發見した事がある。

(二)室積町字西ノ庄小字ゲンベイ山

圓墳

大正五年七月の發掘で石槨の入口は東南に向ひ全長十四尺幅八尺五寸奥壁は一枚石で作られ高四尺五寸幅七尺五寸玄室と羨道の區別は明らかでない發見遺物としては劍頭一個鏡斷片一個銅碗斷片一個坏一個埴一個と木炭等である特に劍頭は怪獸の頭部を透し刻せるものであつてまた周防、長門兩國からは他に例を見ざるものである、近年大津郡深川村字東深川の古墳から劍頭を發掘せられたがこれは頭椎大刀の柄頭であつてその形式を異にして居る、また銅碗の發見も此の古墳より外に例を知らない一つの圓墳であつたけれどもその遺物は珍らしいものを多く埋藏せられてあつた遺物の大部分は東京帝室博物館に所藏せられて居る。

(三)室積町字岩屋丸山

圓墳

大正六年三月余と清力俊亮氏とで調査したもので古く發掘せられて居り埋藏物は不明である昔景清が入つて居つたと言ひ傳へてをるところから景

清穴と稱して居る圓墳が二つ並列して居り一つは未發掘らしい開口して居るものは入口を東南に向はしめて羨道と玄室との間は左右其均衡を保たずして右方にのみ廣まりを作りその幅一尺玄室の長さ二十六尺中央幅七尺五寸奥壁の高さ九尺ある。

同町字郷ヶ崎にも圓墳が澤山あるこの事である。

(四) 伊保庄村字上八小字宮田第五千二百九十二番畑地

圓墳

大正三年二月二十五日余の調査したもので石槨人口は東南に向ひ羨道の高さ二尺六寸五分でその長さ六尺六寸幅六尺玄室の長さ十二尺幅五尺三寸中央高さ六尺ある。

同字オイザルにも石槨あり明治初年土器多數を發掘せられたと云ふ事である。

(五) 伊保庄村字向田小字尾尻

圓墳

大正三年二月十五日余の調査したもので、石槨全長十一尺幅三尺高四尺で蓋石は古く取りのぞかれて存せず、羨道と玄室との區別はない此の石槨内部から發見せられたものは陶器類では臺附埴一個、吸埴一個(高さ三寸八分口径二寸二分)高埴二個破片で下部に圓孔三ヶ所あり、平瓶一個高さ四寸口径一寸八分、坏五個、横瓶二個(俵形のもので高さ一尺口径四寸五分)内部に同心圈狀の捺紋様がある朝鮮土器と稱せらるゝもの、土器類(茶褐色)にては埴一個、高埴一個高さ二寸五分で遺物は同地の小學校に保存せられて居たが現今山口高等學校歴史教室に陳列せられて居る。

此の古墳は大正十年六月再度調査した節には破壊せられて無くなつて居た同字安原にも圓墳一ヶ所あり羨道と玄室は區別無く全長十一尺幅三尺高四尺で入口は南に向つて居る發見品は提瓶一個で高一尺一寸口径二寸五分のものである。

(六) 伊保庄村字中村小字開作八幡山頂

双墳

一六

大正十年六月十五日余の調査したもので圓墳二個相對して築造してある之れは双墳と稱するものでまだ防長兩國内では他にその例を知らざるものもあるけれども破損甚だしくほとんど破壊して居るその左側の石槨入口は東南に向ひ周圍七十八尺高十八尺で現存せる玄室の高さは二尺七寸幅三尺七寸長さ六尺六寸で此の蓋石(天井に用ゐられし石)は大なるもの長さ六尺幅三尺六寸ある右側のもの石槨入口は同じく東南向きである、周圍七十二尺高さ十二尺で蓋石の大きなものは長さ九尺六寸幅四尺八寸此の兩墳の間七十二尺ある一つの獨立せる丘を利用して作られたものである。此の丘の麓にも小圓墳が四五ヶ所あつたのを破壊せられて平瓶一個高さ六尺五分口徑二尺横瓶一個高さ一尺三寸口徑四寸埴に窰印のあるもの高さ二寸七分口徑二寸五分一個を發見して居り埴は同所の加茂神社に在る。

(七) 伊保庄村字和田石

圓墳

大正三年二月十五日余の調査したもので石槨は入口を東南に向はしめ入口幅一尺二寸羨道長さ六尺六寸高さ二尺六寸五分玄室の幅五尺八寸長さ十二尺高さ六尺である。同地に破壊せられた石槨がある全長十一尺幅三尺で入口は同じく東南向きであるその入口に近く横瓶一個高さ一尺口徑三寸五分と埴並に銅環一個を發見した。また同地小字安原にも破壊せられた石槨がある發見物として埴一個高さ五寸二分口徑三寸四分横瓶一個高さ一尺一寸八分口徑四寸これは大正五年四月十一日余が同地の小學校で調査したものである。また同地字赤石にも二個の圓墳がある一つは破壊せられて陶器類の發掘があつたこの話である一つは未發掘らしいものである。

(八) 阿月村字妻崎七二三ノ田地

圓墳

大正三年二月十三日余が調査したもので石槨は破壊せられて不明である發

一七

見物は陶器類多く高坏一個高さ五寸六分口径六寸五分臺附坩一個高さ九寸口径三寸一分高坏二個高さ二寸七分口径四寸一分外に坏二個甕一個の破片がある此等の遺物は今は山口高等學校歴史教室に陳列してある。

(九) 阿月村字小田沖

大正元年余の調査したもので海中から上代の遺物を発見せらるゝ事は稀れにある同所から大甕を発見せられた高さ二尺五寸口径一尺二寸中央周圍五尺九寸ある。

その目的たるや明らかでない、(一)海神を祭る爲めに海にしずめたるもの(二)水葬等に用ゐたるもの(三)あやまつて運搬中に海中に入りしもの(四)地形の變りし爲め陸地より海中に入りしもの等の内であらうと思はれる兎に角本郡中に於ける最大の陶器である同所加茂神社の所藏品である。同村字積からも提瓶一個と土器質の坩高さ七寸七分口径五寸四分一個を発見して居る同地小學校で大正三年余の調査したものである。

(二〇) 上關村字四代

圓 墳

大正元年室津の人吉田修三氏の報によれば同所に圓墳ありて坏坩などを發見せしこの事である。

(二一) 佐賀村字百濟部小字阿多田嶋

前方後圓墳

大正二年六月余の調査したものである。百濟部はクタナベと稱して居る百濟の民此の地に來りて住みしと言ふ傳説がある。未發掘で全山に葺石がある前方部を西北に後圓部を東南に向はして居る。西南全長二十六間前方部西北十八間四尺前方部高さ一間四尺後圓部高さ三間一尺ある本邦内で完全に残つて居る前方後圓墳として貴重なのである。

同墳の附近に圓墳があつた倍塚と思はるゝものです。すでに石槨は破壊せられて臺附坩一個甕一個などを發見せられた事がある。

(二二) 佐賀村大字佐賀小字森ノ下白鳥神社々地

前方後圓墳 圖版第二、第三、第四、第五、

大正二年三月余の調査したものである本郡内で第一の大墳である全山葺石を以て葺いてある倍塚をも存して居り濠の痕跡もある前方部を北に向はしめて居り前方部の高さ四間五尺後圓部六間前方部東西長さ三十七間南北全長五十五間である。

白鳥神社は和泉國大島郡大鳥神社を勸請して後圓部を開拓し白鳥神社を創建し爾來永正二年三月、天正十九年四月、慶安五年八月、永祿四年三月、寶永三年八月、寛延二年十一月の六回社殿改築の都度其後圓部を掘鑿し社殿の敷地を擴めしもので寛延二年十一月開拓の際後圓部より古鏡二面(甲、直徑五寸八分、乙、直徑四寸四分) 碧玉岩製管玉十二個(現存十一個) 鐵器斷片、直刀斧頭(長さ三寸五分幅一寸) 巴形銅器五個(朱を着く) 直徑一寸八分五厘中央高さ三分五厘、埴輪圓筒並に埴物破片(馬) 朱塊少量、土器破片等を發掘せられ同神社に所藏せらるゝ鏡(甲)は獸帶鏡で薄手の色稍黒く鉛色を帯びた銅質である(乙)は神獸鏡で風化して青鏽を生じて居る。

同村字名切にも圓墳があり平瓶、坏などを發見せられたこの事である。

(二三) 三輪村字大方

圓墳

大正元年九月二十六日余の調査せしもので石槨は破壊せられしもので發見物としては提瓶一個(鈎狀の紐掛を有するもの) 高さ七寸口徑二寸五分中央周圍一尺五寸のものを出だして居る。

(二四) 大野村字南小字丸山(大久保第七第八番地山林)

圓墳

大正二年四月余の調査したもので箱形の石槨露出して居る頭部を東南に向けて全長六尺幅二尺八寸深さ二尺で石質は青味のある水成岩である近頃學界で命名された阿波式石棺と稱せらるゝものに似て居る蓋石も三板で出來て居る。

同村字中村にも石槨の破壊せられて甕の破片埴一個高さ五寸五分口徑三寸四分のもの坏の破片を大正二年四月八日に發見した。

(二五)大野村字北村小字馬出第九百四十番地田地

三三

石器時代遺物包含地

大正二年十月余の調査したものである。地下數尺で彌生式土器の包含地がある土鍾一個を發見した此の地方には此の種の包含地が澤山ある様子である。また石器は發見しない此の地に巨人傳説がある。太古此の地に巨人住みて「あみ」を作り魚をとりて食せしとぞ。土鍾を發見せるはこの傳説と符合して面白い事實となりはしないかと思はれる。

(二六)大野村字北村小字宮畑

圓墳

明治二十年の發掘である大正二年十月二十日、余の調査せしものにて石槨は破壊せられて田地となつて居る當時發見せられた遺物は土地所有者金保寅之助氏が保存して居らるゝ同氏の談によれば石槨の内部から多數の木炭

が出たこの事である陶器類だけ保存してある高坏これは蓋附のもので長方形の透が三ヶ所二段にある高五寸口徑四寸五分臺附埴一個横瓶一個俵形で高さ七寸五分口徑四寸五分中央周圍二尺六寸七分ある。同村字長谷から刻線ある滑石製の紡錘車直徑一寸八分高さ五分のものが發見せられて居る。

(二七)大野村大字南村小字宮原第六百四十八番地山林

圓墳

大正三年五月二十五日の發見で石槨は羨道と玄室との區別の無い全長九尺幅七尺高さ六尺のもので發見物は坏八個高さ三寸口徑五寸提瓶三個紐掛は鈎状のもの(一)高さ九寸二分口徑一寸(二)口徑二寸五分他は破損甚だしい埴一個高さ三寸口徑二寸五分蓋坏一個摘のあるもので直徑二寸九分である高坏二個(一)口徑三寸八分下部缺損長方形の透あり(二)高一寸六分口徑四寸七分圓形の透が三ヶ所ある。同村大字南字大久保第四第七第八番地にも圓墳がある石槨全長六尺幅二尺八寸大正十年三月十五日余の調査したものである。

三三

(二八) 大野村大字南小字東前寺第五百四十四番地山林

二四

圓墳

大正十年三月十五日余の調査したもので石槨四個並列して居る東南向きの丘上にある昔此の丘上の下に東前寺があつたのである右側より第一號墳として説明する。

第一號墳

此の古墳よりは明治二十年發掘せられその當時立會ひし古老の談によれば大刀を側に置き鎧をまごひし巨人を發見せし由にて種々談を聞きし結果頭椎太刀の出でしは事實らしく太刀頭はその人近年まで保存したれど今は所在不明となりと言ふ。

第二號墳

石材として石槨を破壊したものである。

第三號墳

未發掘である蓋石は露出して居る。

第四號墳

美道の石材を取りしも玄室は未發掘であるこれ等の古墳は全長十六尺幅九尺位のもので古墳と古墳との間は十五、六間ある。

同村大字新屋に組合せ式石棺の一部がある石質は凝灰岩で全長四尺一寸五分切合せの凹所の間三尺幅二尺でいつ頃の發掘か明らかでない所有者井原藤吉氏宅の後方山頂は古墳の所在地としても好都合の所である小丘陵で或は此の丘から發掘せられたのではないかと思はれる大正十年六月二十七日余の調査したものである。

(二九) 麻郷村大字麻郷字鳥越小字藤尾山

圓墳

大正十年の發掘で石槨は破壊せられて居る遺物としては埴一個頸長さもの高さ七寸五分口徑三寸四分敷があるものであるこの外大甕一個高さ一尺五寸口徑六寸七分で先きに記した伊保庄小田沖の海中から發見せられた甕と同形である。

同村字奈良小字下奈良にも石槨の破壊せられた古墳がある遺物は高坏、埴の破片散在して居る大正三年同地の清力俊亮氏の報告である。

(二〇) 麻郷村大字麻郷字鳥越山

圓墳

大正二年四月三日余の調査したもので石槨は羨道と玄室の區別が無いもので全長四尺六寸幅一尺八寸高さ一尺七寸蓋石二枚で石槨内を赤色の「ベニガラ」様のものでぬつてある。
遺物は鐵鏃刀の斷片を發見せられて居る。

(二一) 田布施町大字大波野字天皇原小字納藏第二八三番地

圓墳

大正元年余と活田彌一氏と共に調査したものである盛土の周圍五十五間あり石槨は奥壁幅六尺七寸玄室の長さ十四尺中央幅五尺三寸五分玄室奥壁に近く一段高き所があるその幅三尺四寸五分高さ一尺羨道長さ二尺四寸右側一尺五寸此の古墳は古く發掘されたもので入口は東南向である。
その周圍に埴輪圓筒が残つて居るが此の圓筒は埴土でなくて陶器質のものである事は注意すべきである。

(二二) 田布施町大字大波野上彌ヶ迫第三百十五番地山林

圓墳 圖版第十六

石槨は古く破壊せられて居る横瓶を發見されしこの事でまたその周圍から埴輪土偶を發掘したこの事であるが余はまだ實物は見ない。
同村同字小字天皇原惣津にも石槨があつたこれも破壊せられて平瓶一個口徑一寸六分高さ五寸、提瓶一個口徑一寸八分高さ五寸五分、蓋附坏一個口徑四寸五分高さ二寸二分、高坏一個口徑五寸下部破損のもの、土器の徳利形埴一個口徑一寸八分高さ四寸四分を發掘されて居る外に糸底ある土器二寸八分の平皿形のものも發掘せらるこれは後世の混入かまた當時用ゐられしかは研究すべきである。

(二三) 田布施町大字波野字御藏戸小字キツネビラ

圓墳 圖版第九、第十三、第十五、第十六、第十八、

明治四十四年七月七日余の調査したものである石槨二個露出して居る一つは破壊せられて全からず一つは多數の遺物を發見したその埋藏の位置もほぼ明らかである。

石槨入口を東南に向はしめて居り美道のなかばは破壊せられて居り美道高さ一尺八分幅二尺長さ二尺で玄室との堺に左右廣まりを作る玄室長さ十七尺幅(奥壁)八尺である何れも自然石を以て築造してある内部は發見當時土砂を以て埋れて居た。

まづ遺物の發見位置と種類から記する。

美道の入口に左右兩方に「キツサキ」を外方に向け刃を内側にして直刀二本を置いてあつた右側の直刀附近に鐵鏃が八個ばかり發見せられた此の直刀は左側のもの(1)長さ二尺二寸八分幅一寸で右側のもの(2)長さ三尺六寸幅一寸である右側のものには鐔の殘缺が附着して居たその近くに(3)鐵鏃があつた長三角形のもので長さ三寸一分上部幅一寸五分下部幅一分ありこれは正倉院御物の内聖武天皇御遺愛品と稱せられてある品と同形のものである事は注意すべき事である。

それより玄室に入り右側石垣に近く土器質の(4)碗形をなせる赤色の色料を着けた高さ一寸三分口徑四寸五分のものを發見したこれと向き合せて左側石垣に近く同じく素焼の(5)高坏に赤色料を着けた高さ二寸七分口徑四寸七分のものがあつたそのなりに(6)蓋附坏一個があり而してこの美道

より玄室に入らんとするところ中央に(7)銅環横一寸縦七分のものが五個發見された右側土器碗形の次ぎに(8)臺附埴高さ五寸五分口徑二寸七分のもの一個ありその次ぎに(9)提瓶疣狀の紐掛あるもので高六寸三分口徑二寸七分のもの一個あり左側高坏にこなりて(10)大甕高さ一尺五寸口徑五寸八分のものであり此の大甕の中に高坏下部に透しの無い高さ四寸五分口徑四寸四分のもので一個が入れてあつたこの大甕は下部を自然石で圍つてあつた右側に近く(11)臺附埴高さ五寸四分口邊の缺けたもの一個あり中央部に(12)高坏三個列んであつた高さ四寸一分五厘口徑四寸九分である。左側高坏に近く埴二個列んで居たその奥の中央部に(13)蓋坏が一個ありその奥に平瓶が二個列んで居る此の平瓶の右側に(14)鐵鏃五本を發見したその近くに(15)鎌が一個あつた長さ六寸五分幅九分五厘それより中央によつて農具の發見は珍らしい事である(16)銅環四個を發見した横一寸八分縦八分五厘横一寸二分縦一寸(これは中間空筒のもの)で鍍金が残つて居つたこれにこなりて(17)平瓶を二個發見したが缺けて居た左側に近く(18)提瓶一個があつたこれより少しく前方に(19)埴二個を發見した高さ四寸四分口は缺けて居つた。高さ二寸二分口徑三寸のものである、右側鎌より石垣に近き所に

(20) 高坏一個があつたその奥壁に近き所に(21)大甕が置かれてあるこれと並列して中央に(22)平瓶二個あつたそのとなり左側に近く(23)蓋附があつた。(別圖参照)

(二四) 田布施町大字波野字御藏戸小字力善

墳 圖版第十一、第十九、

明治四十四年七月余の調査したもので石槨はなかば破壊されて蓋石(天井石)等は古く取りさらされて無く槨内は土砂を以て埋れて居つた羨道と玄室の區別の有るもので全長十八尺奥壁幅六尺高さ六尺である。

槨内遺物の位置を左記する。

羨道入口を東南に向はしめて羨道の終り玄室に入らんとする所右側に土器の(1)埴が發見せられた此の埴には内部に赤色のベニガラ様のものが入れあつた高さ二寸九分口径三寸三分でこれと向ひ合せて左側に土器の把手ある(2)埴があつた高三寸二分口径三寸七分である、玄室に入りて中央に(3)銅環一個を發見し横一寸一分縦一寸左側石垣に近く(4)管玉一個滑石製で長さ八分横徑二分五厘孔は管形のもの(4)小玉一個玻璃製で長さ二分

五厘徑三分孔は管形である。(4)棗玉一個埋木製で長さ八分横徑五分孔は管形のものを見つけた左側奥壁に近く(5)陶器を多數發見した吸埴(線)三個これは何れも缺損して居る臺附埴二個(一)高さ九寸八分口径三寸二も同じである。蓋坏五個平瓶二個提瓶五個でこの提瓶は(一)は環狀の紐掛を有して高さ六寸口径一寸六分(二)は疣狀の紐掛を有して高さ五寸六分口径一寸七分(三)は鈎狀の紐掛を有して高さ九寸口径一寸二分(四)(五)は紐掛の無いもので高さ七寸八分口径一寸二分の各種である。

かくの如く各種の紐掛を有するものが同一古墳から發見せられたのは其陶器の形式上には時代に差異はあるけれども其製作年代に於ては同一の時代にも製作せられた事を證明するものであらう、左側奥壁に近く(6)銅環一個を發見した。

(二五) 田布施町大字波野字御藏戸

墳 圖

明治四十四年八月余の調査したもので五個の石槨を有する古墳が入口を東南に向はして並列して居る先きに記した大野村字南小字東前寺山林に於け

るものと同様である右側より第一號墳として(一)墳は奥壁の幅四尺全長十
四尺高さ六尺玄室と羨道の區別は明らかでない(二)墳は第一墳と同形であ
る(三)(四)(五)墳は石槨破壊甚だしく不明である(一)墳と大差はない(二)
墳から発見された遺物は摘附坏二個で敷が附いて居る。

口徑四寸二分高さ三寸六分五厘のものが奥壁に近く発見され(二)號墳から
は徳利形の埴一個平瓶二個(一)高さ五寸口徑二寸(二)高四寸五分口徑二寸
と甕の破片を発見された。

同山林中から石槨の破壊されたもので平瓶一個高さ三寸九分口徑二寸坏
一個高さ一寸五分口徑一寸を発見されて居る。

また大正二年五月同字御藏戸小字エンコオクチで石槨の破壊されたものか
ら管玉一個碧玉岩製銀環二個、雲珠破片鍍金製のものを発見された事があ
る同町大字八和田八幡宮裏山にも石槨の破壊せられたものがある陶器破片
を発見して居る。

(二六) 田布施町大字上田布施第六十一番地田地(地目改正以前の小南兵)

石器時代遺物包含地

大正二年活田彌一氏と共に調査したもので丘の斜面に地下三尺幅十二尺位
の土器層がある高坏型のもの埴型のもの等が発見された最も面白い事は斜
線ある土器破片である銅鐸にある斜線紋様に似たものである事は注意すべ
きである。

(二七) 田布施町大字大波野字明地第四百六十一番地

石器時代遺物包含地 圖版第十四、第十七、

大正元年活田彌一、桂章氏と共に調査したものである此の遺蹟の所有者は
同地の人前田慶次氏である耕地地表面から深さ二尺位で多数の土器破片を
包含して居る地層に達する此の層は二尺より三尺の厚さであるすべてが彌
生式土器で外に磨製石斧長四寸三分石槌(たつき石)等を発見せり此地を中
心として面積數十町歩に及んで居る防長に於ける一大遺蹟である此の附近
に小字奥之坊と稱する所に一大岩石の露出した現時石切出場がある此の大
岩石の下から完全の彌生式土器が発見されまた銅器の斷片が出た之れは銅
銚の關係品であらうこの事である此の土器は高さ七寸三分口徑四寸五分で
ある。

また同字上段田地にも土器包含地がある大正三年十二月田地に井戸を掘つたとき磨製石斧長さ三寸八分のもので地下十尺の所から発見されて居る。同町御藏戸山林中から石槌(たつき石)二個を発見した事がある。

(二八) 田布施町大字大波野字ツボツ天王山

圓墳

大正六年四月十日余の調査したもので古墳は小丘上にあつて同字の共有地である石材發掘の爲めに村民の發見したものである余の調査したときは石材全部を取りさられてその埋藏位置石槌の大きさ等知るべくもなかつた其封土は残されて居り石槌入口を南に向はしめ約二十二尺中央幅七尺奥壁幅七尺高さ六尺七寸位で盛土地の高さ七尺五寸位で羨道と玄室の區別は有つたものと思はる遺物は多數發見せられたが心なき人夫の爲めに取り出されたので不明になつた物が多し余の調査によつて知つたものを左記する。玉類では曲玉二個共に碧玉岩製である(一)は頭より尾までの長さ一寸中央厚さ四分孔は漏斗形(二)は頭より尾までの長さ九分中央厚さ四分背太り形で孔は漏斗形である。練玉數個長さ一分直径一分孔は管形である玻璃玉一

個水色の美しくしいもので長さ三分直径二分孔は管形である、棗玉二個これは琥珀製のもので長さ一寸直径二分孔は管形である(一)は埋木製で長さ五分直径二分五厘孔は漏斗形である陶器類では吸埴(隰)一個高さ六寸五分で口は缺損して居る孔は五分、埴一個高さ七寸口径三寸、平瓶一個高さ四寸三分口径一寸六分外に坏六個高坏三個埴破片等が發見せられた金屬製品類鍍銀をした銅環が十二個發見せられ(一)直径九分(二)直径一寸一分、等である鐵鐔の破片は透しあるものである。

鐵釘長さ五寸五分頭の径五分縦に凹線があるこれは釘として使用されたかまたは他に武器として用ゐられたかは不明である今かりに鐵釘と名づけて置くこれは數本發見せられて居る。鐵鏝一本だけ實見したけれどもまだ發見せられた事と思はる長さ三寸三分である此の外鐵製品馬具の一部と思はる、鐵環の如きものも有つた此の遺物の大部分は東京帝室博物館に藏されて居ると思ふ。

(二九) 鹽田村字城第一千三百二十四番第一畑

圓墳

明治二十年頃の發見で吸埴、提瓶、坏、直刀、其他發見せられた由である。同地の第二千六百三十三番地に未發掘と思はる、圓墳がある。此の地石城神社に曲玉一個を藏されて居る。或は此の地方より發見されしにはあらざるか。此の曲玉は刻線ある滑石製の珍らしいものでその線内に朱が着いて居る長さ一寸八分五厘である。

(三〇)城南村大字宿井字吉井小字ヤクジン

圓墳 圖版第十

明治三十二年同地所有者山下秀三郎氏の發見でその當時石槨は破壊せられた。明治四十二年三月余の調査せし節はほとんど墳形を残さず圓墳なる事だけは知る事が出来た。その發見物は曲玉、小玉、金環、埴、高坏、横瓶等で共に東京帝室博物館の所藏である。同字宮ケ田にも圓墳がある。石槨を存して居る玄室高さ十二尺。羨道は破壊せられて無い發見品は提瓶、高坏、土器破片である。明治四十五年五月余の調査せしもので此の古墳は古く開口せられたものである。

(三一)城南村大字宿井小字後井(寺山と稱す)

圓墳 圖版第六、第七、第八、第九、第十、第十一、第十二、第十五、第十六、第二十

明治四十四年余の調査したものである。此の地には圓墳五六個あり、石槨露出せるもの三個ある。その左側より第一墳として記す。
 (一)墳は古く發掘せられたもので文化年間に開口せられたものである。石槨は入口を東南に向はしめ羨道の長さ十五尺、幅六尺、玄室長さ十八尺、中央幅十二尺、奥壁幅十尺五寸、高さ八尺で奥壁の石材は一枚石である。
 (二)墳は(一)墳と其の間ほとんど盛土地が連つて居る開口も(一)墳と同時代である。羨道の長さ十尺、幅三尺五寸、高さ二尺七寸、玄室長さ十尺四寸、中央高さ十二尺、奥壁幅九尺、高さ六尺入口の方位は(一)と同じく東南向である。只墳内の敷を二枚の平石で作つてある事は他に例を知らない事である。
 (三)墳は明治四十四年の發掘で埋藏物の位置が知られて居るものである。此の古墳は古く蓋石を取りて内部は土砂を以て埋れて居つた、入口は東南に向つて作られ。羨道長さ十四尺、幅三尺、高さ四尺、玄室長さ十二尺、奥壁幅八尺、高さ六尺である。今その發見物の位置を記せば、

美道入口より玄室に近く横に凹所を作つて之れに二列に(一)蓋坏十個を列べてあつた。(一)高さ二寸五分口径五寸五分(二)高さ二寸五分口径四寸四分等である。この蓋坏の内二個には内部に淡水に産する「カラス貝」を入れてあつた、之れはその古墳築造當時供物を盛れるもの、残存したものである。この蓋坏は高さ二寸五分口径五寸二分である。かゝる発見は日本内地では珍らしい事で朝鮮にてはその発見例は稀れにある。

此の焼物類を古墳石槨内に納めたるは、當時に於て何物かを此の内に入れしものである。決して斯る器物のみを納めたものではあるまいと思はる、けれども流動物の如きは疾く散逸し其痕跡をだに止めず、有機物と雖も年代の久しきにより其形迹を有するもの極めて稀れである。本品の如きは此種の資料として貴重なるものである。

二個の内一個は東京帝國大學理學部人類學教室に寄贈し一個は余の珍藏するもの之れである。此の蓋坏より少しく奥に進みて右側石垣に近く土器質の(二)埴を発見した、高さ二寸三分口径五寸で内部に赤色のベニガラ様のものが入れてあつた。それと向合ひに左側に把手を有する同じ質の(三)土器があつた、高さ二寸五分口径二寸三分で把手の長さ一寸である。この石

槨内に於ける土器の埋藏位置は前記田布施町御藏戸に於けると同様で、かゝる埋藏の方が當時をこなはれて居つた事が證せらるゝのである。此の土器と土器との中間美道にて鍍金製の(四)雲珠三個直径三寸のものを発見した、雲珠は馬具の一部である事は言ふまでもない。それに近く鐵製の(五)鎌が置かれてあつた、長さ六寸五分幅八分である。それより左側美道のつきんとする所にて(六)横瓶一個を発見した、俵形のもので高さ九寸五分口径二寸八分周圍三尺二寸である。その右側にて(七)大高坏があつた、下部は缺けて居るが口径は九寸五分である。これに近く鐵製の(八)鉞(斧頭)があつた、長さ五寸一分五厘肩幅二寸頭部幅一寸三分である。

玄室に入り左側に廣まりが作られて居る。この所に(九)蓋坏二十個を重ねてあつた、高さ二寸五分口径五寸五分いづれも少しの差はあるが大さは大方同じである。またこゝに吸埴一個高さ五寸五分口径四寸二分(十)高坏三個を発見した高さ六寸二分口径四寸二分である。これと少しくはなれて(十一)提瓶一個あり、鈎狀の紐掛ある高九寸口径四寸のものである。これととなりて右側石垣に近く(十二)鐵鉢一個があつた、これは長さ九寸三分で鍛冶用のもので「ヤットコ」と稱せられて居るものと同様である。これに近く

(13) 砥石一個があつた長さ九寸五分幅三寸五分である。玄室右側によりて多数の(14) 玉類と環を發見せられた、按ずるに此の玉類を發見なせし所が棺を置いた所と思はるゝのである。今その玉の種類と數を記す。まづ左側高坏三個の發見に近く練玉多数發見せられてその中に純銀製の環が三個あつた、縦徑九分横徑七分で小さい銀線で作つたものである。玉類としては曲玉二個(一)は碧玉岩製で頭より尾まで一寸中央断面徑四分の厚板形である。孔は漏斗形で(フ)の字形をして居る。(二)は玻璃製で水色の美しいもので頭より尾まで六分中央断面徑三分背太の形孔は管形であつて(ノ)の字形である。此の方の分玄室の奥壁に近い所から發見せられたものである。小玉類では玻璃製十數個、滑石製白玉二十數個、練玉四百數十個でこの練製は黝黑色のもので二個又は三個連續したものがあつた。此の種の玉の製作方法を知る参考資料となるものである。また一古墳からかくの如く多数の練玉を發見した事も珍さすべきである。切子玉八個これは水晶で作られた六角形のものである。縦六分孔は漏斗形であつた。

左側最奥壁に(15)直刀一本と吸埴一個があつて、刀は横に左側にキツサキを向けて鐔は六窓ある鐵鐔であつた。此の鐔縦三寸横二寸一分厚き一分である刀は斷片であつたが二尺以上の長さであつた。吸埴は高さ四寸八分口徑三寸八分孔の直徑五分である。右側玄室石垣に近い所に(16)鐵鏃二十數本長さ四寸五分直刀斷片、馬具、轡等の斷片を發見した。美道に近く鐵鏃の方によつた所から鐵床長さ三寸六分直徑一寸六分柄の孔二分のもの鐵床長さ三寸一分直徑七分のもの等の鍛冶用具が發見された。事は此の古墳以外にまだ本郡にその例を知らない。

本古墳は一小圓墳として種々の遺物を埋藏してあつた事とその埋藏の位置を調査したのは學界の爲め好参考と思ふ。なほ本墳の玄室の中央部より古錢六個を發見して居る。古墳より古錢の出づる事はその例他にもあれども本古墳より發見せし古錢は(一)皇宋通寶(二)祥符元寶等であつて、皇宋通寶は支那の北宗寶元二年(我が後朱雀の長曆三年紀元一千六百九十九年)に鑄造せられたもので、また祥符元寶は同じく北宗の大中祥符元年(我が一條の寛弘五年紀元一千六百六十八年)に改めて鑄造せしものである。されば此の錢は如何に古く見るも九百年以前には我國に存すべきはずはなく。現今とても尙通用錢の内に混り居る有様で、我國で寛永錢の廣く用ひらるゝに

至らざる頃はすべて支那錢を用ゐし事にて足利時代の末期迄は支那錢のみを用ゐし事にて此等の古錢の古墳の中に入れてられしは如何に古く見るも、藤原末期から足利の終りの時代となきべからず。然るに土器陶器に至りては如何に新らしく見るも奈良朝よりあまり下ることはなかるべく年代に非常の相違ありしかも、屬々古墳内より此種の古錢を發見する事あるは(一)後世に於て過つて古墳を發掘せし場合之れを舊の如く埋むるに際し地鎮の儀を行ひて通用の貨幣(今より言へば古錢なるもの)を入れし事(二)足利時代以後の亂世に當り古墳を發掘する事多く帝王の陵墓すら其事あるに至りここに茶道の流行に連れて古器を好むの風ありしかば、一層盛なりしが如く此場合にも錢を入れて地鎮と爲せし事ある様に思はるゝ事、即ち此の二種の場合に古錢を入れしもの故にかゝる古錢が古墳玄室の中央にあるも當然の事と思ふのである。従つて此の古墳も足利時代の頃一度掘られし事あるものと認めらるゝのである。

また(一)の兩古墳につきその形狀に就て少しく記す事にする。
 (一)墳は現今秋葉明神をその石槨内に祀る。その獻燈に文化十一年十月吉日とあるより見れば、其以前の發掘と思はれる。(二)の兩墳盛土地はほんご

相接して居り石槨入口と入口の隔は三十六尺である一見して前方後圓墳の如くに見られるけれども別々に築造された圓墳と見るべきであらう。余は(二)古墳の入口で内部に同心圓狀の紋様ある陶器破片を發見した。玄室内部に敷を二枚の平石を以て作つてある事は他に例を見ないものである。また美道は玄室の入口兩方に狹まりを作つて連接するのを普通とすれども、右側にのみ偏して造られてある事である。かゝる例は他にその例比較的稀れなものであるけれども、本郡には此の兩様のものがあるのは地方的傾向を示すものである。これ等の古墳は皆自然石を以て作られて居る。いづれも其盛土地三間を越へざるもので周圍に濠を廻らす事が無い。(三)の古墳美道に凹みを作つて蓋杯を入れてあつた事とその中に「カラス具」が入れてあつた事は此の墳の一大發見である。
 此の兩墳の右側五十間隔たりたる所に石槨を發掘された一圓墳があつた。瑪瑙製曲玉一個銅環一個を發見せられて居る。

(三二)城南村大字川西字石走第九百七番地

圓墳

大正十年五月二十八日城南村助役末永嘉太郎氏の案内で本古墳の調査をした。此の古墳は盛土地高二間三尺周圍二十間で石槨は入口東南に向ひ、玄室内に神花社と言ふ小祠がある。發掘年代は不明で前記後井の古墳と小川を隔て、向あつて居る、羨道高さ三尺九寸長さ十四尺で玄室高さ七尺二寸奥壁幅五尺七寸中央幅六尺二寸高さ八尺一寸である。

また同村宿井字廣井第五百三番地にも圓墳があり。石槨破壊せられ直刀が發見せられたと言ふ盛土地周圍四十間高さ八尺ある。また同字行力第九百九十三番地にも石槨の大破して原形を見る事が出来ないものがある。發見遺物は蓋杯高さ三寸二分口徑四寸二分敷あるもの、横瓶高さ八寸五分口徑四寸のものが發掘せられて居る。また曲玉などの玉類もあつたこの事である。土地所有者栗原正一氏の所藏である。大正十年六月余の調査したものである。

また同字吉行第八百六十五番地にも石槨の蓋石露出したものがある。同字吉行第八百六十七番地にも群集して居る石槨が露出して長さ南北二十尺石材六枚の蓋石が露出し大なるものは幅九尺五寸長さ四尺のものもあり。余の調査したときは六個の石槨を發見した。大正十年六月。

(三三) 周防村字小周防小字道場門前田地

石器時代遺物包含地 圖版十七

包含地で彌生式のものである。石庵丁長さ四寸五分二孔あるもの、石斧磨製長さ三寸六分のものを發掘せられて居る。

遺物は大典記念山口縣立博物館に所藏されてある。

(三四) 周防村字立野長徳寺附近

圓墳

石槨の露出せるものあり、陶器發見せられたこの事である。

また同村立野奥河内田上透造氏宅の後方山上にも石槨ありて遺物の發見があつたこの事であるが余はまだ實見せず。

(三五) 嶋田村字宮ノ尾

圓墳

大正三年六月十四日此の古墳破壊以前に余の調査せしもので遺物はそれ以後七月頃に發見せられたものである。

美道入口は東南に向つてその幅三尺八寸、玄室と美道との堺幅二尺三寸、美道長さ七尺三寸、玄室中央高さ二尺四寸（以下埋れ居る）長さ十尺で玄室内を四尺掘下げて遺物を発見した由であるので、玄室の高さは六尺内外のものとなる。

遺物としては金環一個、直径七分、管玉一個、直径一寸、孔は漏斗形で碧玉製である。小玉一個、硝子製である。陶器としては高坏一個、二方に透し、長方形のものがある、高さ四寸三分、口徑一寸七分、埴一個、高四寸三分、口徑四寸、甕一個は破片である。外に直刀断片、鐵鏃の断片等五個あり。これ等遺物は同地の耕地整理の爲め破壊せられて発見されしものにて、同地宮本清市氏の保存さるゝものである。

(三六) 三丘村字吉田

圓墳

大正二年五月同地小学校校長澤米吉氏の報せられたもので、余はまだ調査しない。古く開口されたものらしい、遺物の発見は不明である。

(三七) 勝間村大字大河内小字木舟

圓墳

大正十三年余の調査したもので、同地に共同墓地を設置せんとして開拓中偶然該石塚に掘當りたるものである。

古墳所在地は勝間村役場の正南方千四百メートル字笠野西北方の山頂にある。勝間三丘の村堺線上にある全山赤色土である。石塚は最小のもので、入口を西南に向はしめ、奥壁より七尺の所に一個の平石を以て區劃を作る。蓋石は徑一尺内外の石を以て築造せられしものである。その幅二尺七寸全長十一尺である。

第一室には右方上部に吸埴一個あり、高さ三寸五分、口徑二寸、左方に提瓶一個あり、環狀の紐掛あるもの高さ五寸七分、口徑三寸八分、下方右側に高坏一個、高さ五寸五分、口徑四寸四分のもの、蓋坏二個、高さ二寸六分、口徑五寸七分のものあり。左方に埴一個、高さ二寸八分、口徑二寸七分のものあり。第二室に左方上部に土器質の坏一個、高さ一寸三分の破片があつた。

(三八) 八代村字魚切

同所に朝日傳説がある圓墳があり破壊せられて遺物を發見したこの事であるがまだ余は調査しない。

遺跡遺物の説明

(一) 遺物包含地

主として石器時代に於ける遺物を包含せる地層にして熊毛郡内にては彌生式（石器時代と古墳時代の中間遺物）を包含せる地層あり、田布施町大字大波野小字上段の如き大正三年十二月田地井戸掘の節多數の彌生式土器破片と長さ三寸八分の磨製石斧を發掘せし事あり。彌生式の遺物は我が上古に於ける大和民族の祖先が遠き昔石器を使用せし時代に於てすでに熊毛郡に住せし事を證するものにして國史に言ふ國津神なるもの、祖先とも見るべきなり、本郡内に於ける最古の大和民族祖先の遺せしものと言ふべし。

(二) 古墳

古墳は、大和民族祖先の築きたる古代墳墓にして其始め太古なるは論なく其終りは今を去る千二三百年以前なるべし、多く眺望に富める丘陵にあり

熊毛郡内にては圓墳及前方後圓墳の二種ありて圓墳中には自然の山を利用して作られたるものあり之れを山寄式と命名せり、山寄式古墳は他地方に見る横穴の如く數個並列せるを常とすれども横穴の如く山そのものを掘りて塚に利用せしものにあらず丘陵の一部を掘り取りたる後に石槨を築きしものにして圓墳の一種なり圓墳とは圓形に盛土をなしたるものなり。前方後圓墳とは古墳の前面部方形をなし後圓部を圓形に盛土をなしたるものにして我國特有のものなり、佐賀村大字佐賀小字森ノ下第二千二百四十九番地社地の古墳は本郡第一の前方後圓墳にして前方部を北に後圓部を南に向はしめ前方部高さ四間五尺後圓部高さ六間前方部東西三十七間南北全長五十五間あり。

(三) 槨

本郡内にては皆石を以て之を蔽へるものと四方を板石を以て長方形の箱様に作るものと二種あり槨内の敷は砂礫を以て之を布きたるもの多く稀には城南村大字宿井小字後井の圓墳の如き二枚の平石を以て作りたるものあり、斯の如く作られたるものを名づけて石槨と言ふ石槨には其太き形状種

々あり。

石槨入口を羨門と言ふ奥の室の如き廣き所を玄室と言ひ羨門より奥室までの道を羨道と言ふ、玄室は木棺、石棺、等を安置したる所にしてまた種々の副葬品を入れられしなるべけれども羨道よりも遺物の發見せらるゝ事あり、田布施村大字宿井小字後井圓墳の如きは羨道中間に横に凹所を作り椀形の蓋杯十個を並列しその内二個よりは介殼を發見せし事あり。本郡内にては其玄室の長さ一丈八尺、奥壁の幅一丈〇五寸、羨道の長さ一丈五尺、其幅六尺、玄室高さ一丈二尺奥壁の高さ八尺、羨道高さ六尺なる城南大字宿井小字後井の圓墳にある石槨を最大として全長四尺六寸、幅一尺八寸、高さ一尺七寸の箱形石槨なる麻郷村字鳥越の石槨を最小なるものとす。日本に於ける石槨の最も長きものは備前國赤磐郡牟佐村の古墳に於ける高さ六尺、長さ四十三尺なるものと大和國高市郡白檀村大字五條野丸山の七十尺あるもの現在遺跡中に於ける最も長きものなり、通例羨道の長さは一二間位、高さ六尺位のものにて羨道と玄室の位置はその左右均衡を保てるものを普通とすれども田布施町大字宿井小字後井の一圓墳の如き向つて右に接したるものあり、羨道は多く破壊されて當初の閉鎖状態を詳にする事

困難なれどもこの部分は明け放したるものにあらずして板石を以て閉塞したるものご小さき石を積みて閉鎖せしものごありしが如し。つぎに最小なる組合式のもの頗る簡單なるものにて大野村大字南小字丸山のその如きは全長六尺幅二尺八寸、高さ二尺にして蓋石三枚よりなり阿波國勝浦郡多家良村大字本庄丈六寺山にあるものご同一の方法を以て築かれしものにして箱形石棺と稱せらるゝものなるべし、前者ごその築造を異にせるものにして槨と言ふよりは棺に近きものと言ふべし。

(四) 葺石

佐賀村大字佐賀小字森ノ下白鳥神社々地の前方後圓の大墳は表面より一尺位の地下覆土を取り去れば其頂上より下部まで全體に徑五六寸より七八寸の扁平なる川石を以て之れを葺けりその目的は覆土の流失をふせぎたるものにして之れを葺石と言ふ。

本郡内葺石を用ゐし古墳は皆前方後圓墳のみにして白鳥神社々地の古墳の外同村阿多田嶋のものご近き玖珂郡柳井津町大字柳井小字水口茶白山第三百五番地山林に於ける日本第一の大鏡徑一尺四寸八分外小鏡徑七寸六分等

四面の古鏡を發掘せし全長四十間前方部十七間四尺後圓部高さ三間三尺前方部一間の古墳にも葺石を存すれども白鳥神社々地古墳の如く明らかならず他にはその發見せられたるを知らず。

(五) 埴輪

古墳の外圍には圓筒形の埴物を有するものあり、埴輪ごは埴土を以て作りたるものにして墳墓の周圍に樹てその目的は前記葺石の如く覆土の流失をふせぎたるものなるべし。

垂仁天皇即位三十三年紀元六百六十三年野見宿禰の建築により始めて殉死すべき代りに埴輪を作りたりご雖もそは只種々の物像を作ることを建築したるのみにして圓筒形の埴輪は其以前より使用せられしもの、如し、而して孝徳天皇大化年間に絶々しものなるべし。

(六) 裝飾品(裝身具)

本郡内より發見せられしものは、曲玉、切子玉、管玉、小玉、棗玉、金、銀、銅、環、等なり。

曲玉 曲玉とは曲りたる玉にして其曲れる理由につきては未だ確説を得ず
と雖も最初爪若くは牙等を用ゐしより變遷して遂に玉石を代用するに至
りしと云ふ。

切子玉 水晶を以て之れを作る六方形の結晶面を利用して作りしものにし
て稀には八角形のものあれども本郡内に於ては六角形のみを發見せり。
管玉 管玉とは多くは碧玉を以て作れる緑色の石多きは其竹玉より推移せ
るが故ならんと云ふ。

棗玉 管玉の如くにして棗の形狀をなせるもの埋木等にて作れるもの多
し。

小玉 小玉には練玉硝子玉滑石玉あり。
硝子は通例藍色なれども若し其色濃厚なるときは之れを瑠璃と稱す。
本郡内發掘の玉類の質並に色澤を表示すれば左の如し。

碧玉岩 多く出雲に産するを以て俗に出雲石と言ふ一名青瑠璃と稱せらる
主として曲玉管玉を作れり。
水晶 切子玉は皆此の石を以て作れり、その結晶面を利用せしは明らか
り、六角形のもの多きを以ても知らるべし。

滑石 白玉管玉を此の石にて作れり、此の石にて作りしものは實用となす
よりは主として祭具に用ゐられしものなるべし。

琥珀 棗玉を作れるもの田布施町大字御藏戸小字力善の古墳より發掘せり
埋木 之れ前者の如く棗玉を作りたるものあり。

玻璃 硝子製の玉はその色種々あり、多くは小玉として存すれども勾玉を
發掘せられたり。上古の硝子につきては各地古墳より發掘せらるゝこの
みにては單にその當時に存在せしを證するに過ぎざれども和泉なる仁徳
天皇陵よりは玻璃器の發見せられし事實もあれば仁徳朝には既に玻璃の
存せしことは明らかかなりまた古史の記載により神武天皇橿原奠都の條に
も此の種の玉を作りたる事見ゆ。

瑠璃 玻璃と同質のものなるもその色濃厚なるものを言ふ。
瑠璃 此は古史の所謂吹玉に屬するものにして本郡内にては此の種の丸玉
を城南村より發掘せり。

紅瑠璃 美しくしき紅色のもの曲玉に作られしもの發掘せらる。
暗綠色 (碧玉岩)
透明稍白色 (水晶)

銅	銀	金	赤	黝	黑	水	綠	紺	青	黃	赤	鼠
色	色	色	色	黒	色	色	色	色	色	色	色	色
	(銅環)	(銀環)	(金環)	(紅瑪瑙)	(練物)	(埋木、玳瑁)	(硝子)	(硝子)	(硝子)	(硝子)	(琥珀)	(滑石)

遺物の上に見るこころ凡そ此の如し是等ざりざりの色彩が服飾の上に配装の切目を有するものにして其使用法は耳環及び劍の裝飾品としたるものなり。

遺物の上に見るこころ凡そ此の如し是等ざりざりの色彩が服飾の上に配装

せられたりし當時は如何に美はしかりけむ、埴輪の如き粗略なる土偶もなほその衣服に赤白の彩を施したるものあるにあらずや、衣服冠帽に彩あり加ふるに美玉の連続を纏ふ當時配色の美觀亦想ふべし。

(七) 鏡

鏡は國初以來我が國に用ゐられたるものにして考古學上重要な遺物の一種なり。
本郡内發見のものは佐賀村大字佐賀小字森ノ下白鳥神社々地古墳後圓部より發掘せられたるもの二面あるのみ、その形は圓形にして鍔を生じ變色せり、是等の鏡は漢式の製法を傳へたるものなるか或は直接に之を輸入せしものなるべし。

(八) 武器

刀。長刀あり短刀あり此種の品にして本郡内發見品は皆片刃なり孰れも直刀にして鐔は寶珠形をなす六窓のものゝ無窓のものゝあり。
劍頭。刀劍の柄頭に用ゐられし鍍金製のものにして怪獸の頭部を透刻せる

もの室積町の古墳より發掘せられたる事あり。
 鐵鏃。形狀大小種々あれども多くは腐蝕して全形を見るべきもの少し。田
 布施町大字御藏戸小字キツネビラ發掘の長三角形をなせるものは正倉院
 御物聖武帝御遺愛品中に同形の品あり。
 鐵斧。新に稱するものにして日用品として用ゐられ時として武器に用ゐし
 ものなり、その形に二種あり柄を指込むものと柄に指し込むものと二種
 あり

(九) 馬具

轡、鉸金、鍍金製雲珠其他附屬品を發見せしも皆斷片のみにして完全なる
 ものなし。

(十) 鐵工具

鐵槌、鐵鋏、鐵床の古墳より發見せらるゝは甚だ稀にして鍛冶用として用
 られしものなり、之れ等の遺物と共に城南村の古墳より砥石を發掘せら
 れしは珍らしき事と言ふべし。

(十一) 農具

木郡内農具の發見せられしは鎌あるのみなり。

(十二) 土器の歴史的分類

何れも釉薬を用ゐざるものにて形種々あり左の如く分類せらる。



考古學上「ヤキモノ」と稱するものを三大別する事が出来る、先史時代の
 繩紋土器と同時代の彌生式土器と原史時代の陶器である。
 原史時代に於ける埴師部土器は先史時代に於ける彌生式土器と其年代こそ
 異なりたれど同一人種の作つた同じ性質のものを見るべきである。
 先史時代に於ては如何なる方法を以てかゝる土器を作りしか今日北海道の
 アイヌは粘土と砂と合せて「ねり」それに纖維の細い草を切つて中に水を
 入れて圍爐裡中で水を蒸發させると言ふ事である。大方繩紋式や彌生式は

かゝる製法を用ゐしものなるべけれど繩紋式に轆轤を用ゐたるものなく彌生式には此の轆轤を用ゐられたるものがある、原史時代の陶器に至りては其窯の完全して一千五百度以上の熱を以て焼きしものと思はるゝ其製法は彌生式と其の製作同様なれども只窯の完全したる爲めにかゝる硬度の陶器を製作するに至りたるものである。

これ等の陶器は朝鮮にも三國時代（高句麗、新羅、百濟）の古墳よりも發見されこれ等彌生式の進化は漢族文化の影響を受けた日韓祝部窯の完成である。

この時代の窯で我が防長で發見されたものは、

(一) 長門國厚狹郡須惠村字大須惠高尾山

(二) 周防國玖珂郡余田村字小原第六百十五番山林

(三) 周防國吉敷郡陶村

等である、その形状は山の斜面を利用して作られて「トンネル」の如くそして下部に階段を作りて土器を並べる様にしてありその附近よりは陶器の破片や木炭が多數發見される。

その完全なるものは豊前國築上郡友枝村字西友枝小字瓦ウドにありその階

段の高さ一尺五寸、幅一尺一寸五分、天井までの高さ四尺七寸五分あり段々は十三になつて居る、その上部が圓筒形の煙出しになつて居りこの窯跡は今天然紀念物として保存せられて居る、余と同地の吉村鐵臣氏の發見である。

またこの陶器中には稀に釉薬を有するものあり、これ等の有釉陶器は偶然の出來事で決して釉薬を用ゐたるものにあらず原史時代の製法は直接焼成法にて焼ける際に燃料の灰が器物の火前の面につき薪材の灰の中には多量の「アルカリ」を含んで居り高熱中で器物の中の礬土と硅酸分とを取つて其表面に不完全な硝子層を作りたるものである。

齋瓮は一つに祝部と稱するものにして上古祝部の部民之れを製造したるより此の名ありと言ふ。

此の種のものには日用品として用ゐしものにして無紋のもの多けれど櫛の齒にて描きたる如き波紋を附するものあり、色は多く蒼黒色なれども時として黝黒色又は稍々赤色を帯べるものあり、製造するに轆轤を用ゐる往々其表面に痕跡（の、字形◎形）の二種を有するものあり。

朝鮮土器は齋瓮と其製法色澤性質異なるなく又一種の齋瓮に外ならず、朝

鮮に於て今も尙此製法あるによりて朝鮮土器と名づく。土器の裏面には多數の同心圈状の捺紋様を有するを常とせり。前二種は共に釉薬を用ゐざる故倅しく素焼土器に外ならざるも慣稱上特に此名稱に限り古墳より出す、此の種の土器を陶器と稱す。素焼土器、前二種と共に釉薬を用ゐざる其色赭色にして其質は亦前者に比して軟かきものにて其製法は轆轤を用ゐず之等を素焼土器と稱し土師の作りたるものなりと言ふ主として祭器に用ゐるものにして陶器の如く日用に使用せられしものにはあらざるべし。

(十三) 銅 椀

齋瓮の平皿と同形のものにして銅を以て作れり、古墳より此種の品を發掘する事稀にあり、室積町の古墳よりその斷片を發掘せし事あり、土器の外銅器の存在せしは之れを以て知らるゝものなり。

(十四) 紡錘車

綜麻石又は臍石と稱するものにして滑石を以て作れる石製品なり紡錘車と

して使用せしものなるべし、大野村より發掘せしは此の種のものなり。

本書は周防國熊毛郡の上代遺蹟遺物を調査せしものにして主として考古學の普及につとめその説明には左記の書を參考せり。

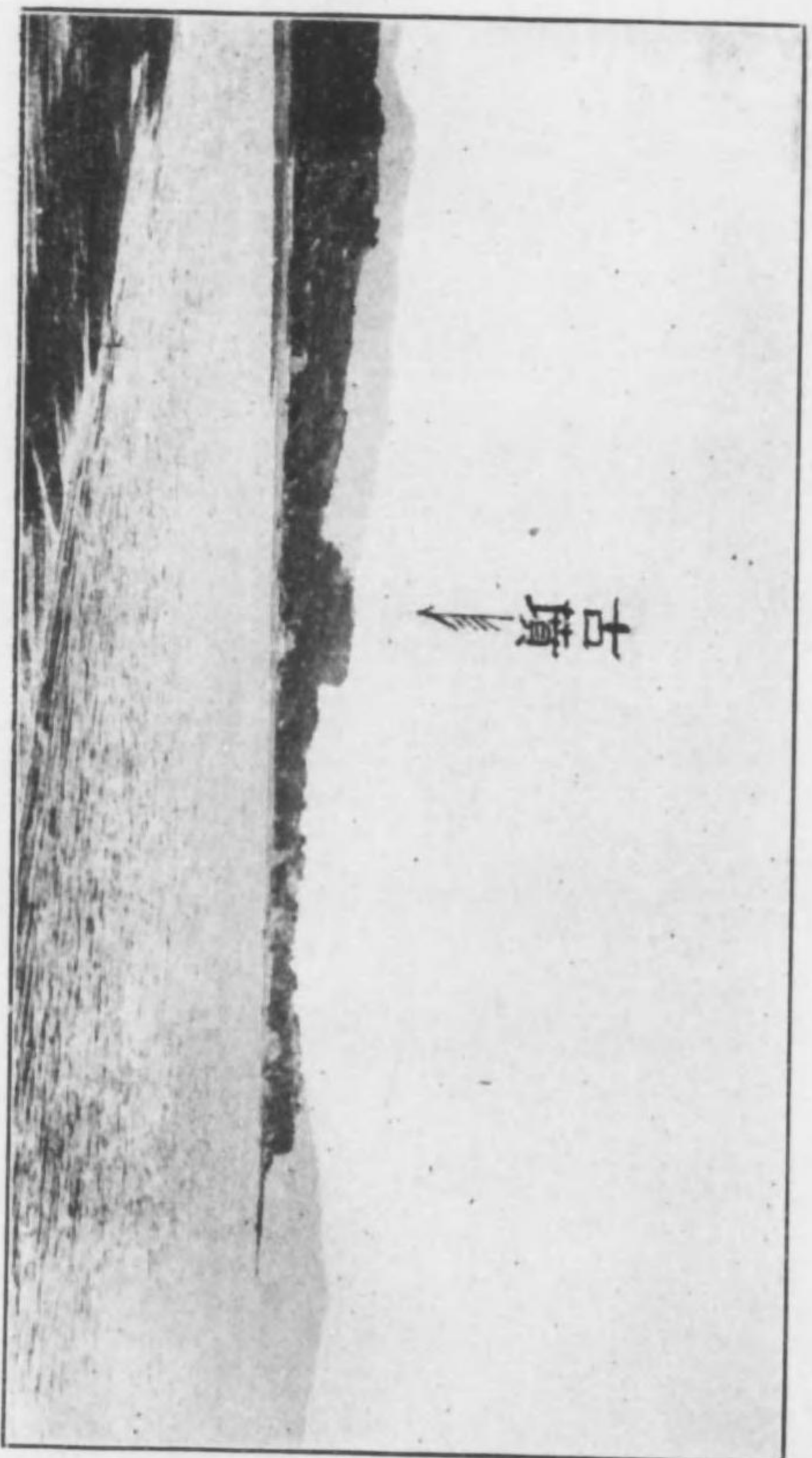
考古學	高橋健自先生著
鏡と劍と玉	高橋健自先生著
考古學雜誌	東京考古學會
人類學雜誌	東京人類學會
通論考古學	濱田耕作先生著
防長考古學雜誌	防長考古學會
佐賀村白鳥神社の記	白鳥神社
鑑鏡の研究	梅原末治先生著
防長考古資料寫真集	山口高等學校歴史教室
古墳掘穴地名表	東京帝國大學
日本石器時代人民遺物發見地名表	東京帝國大學
京都帝國大學考古部研究報告書	
朝鮮總督府古蹟調査報告書	
古墳と上代文化	高橋健自先生著
大日本地名辭書	吉田東伍先生著

圖

版

周防熊毛郡
遺跡遺物發見地圖 (第一圖版)





前方後圓古墳遠景 (第二圖版)
佐賀村大字佐賀小字森、下白鳥神社之地



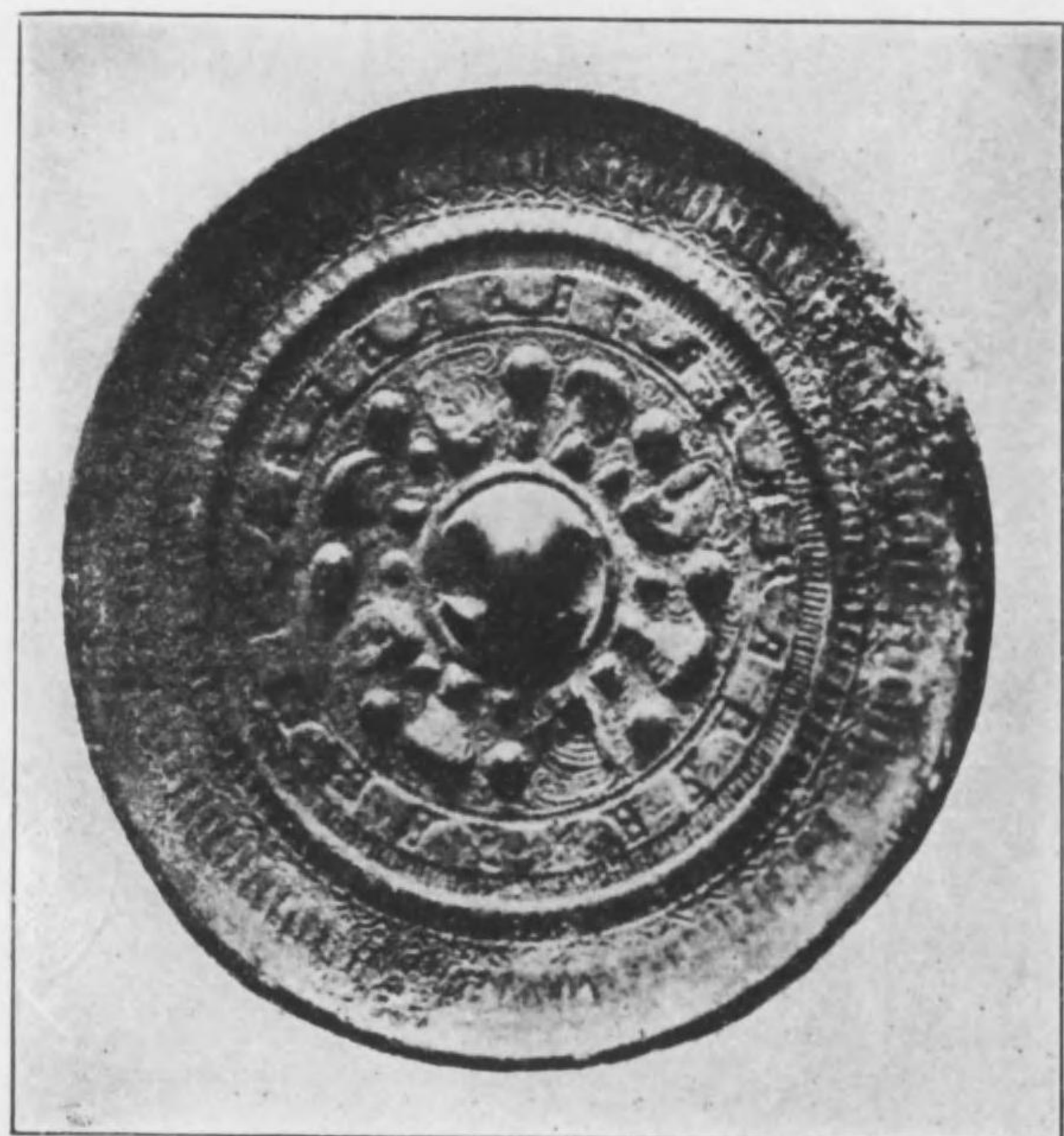
巴形銅器 (第三圖版)

佐賀村大字佐賀小字森ノ下

白鳥神社社地古墳發掘



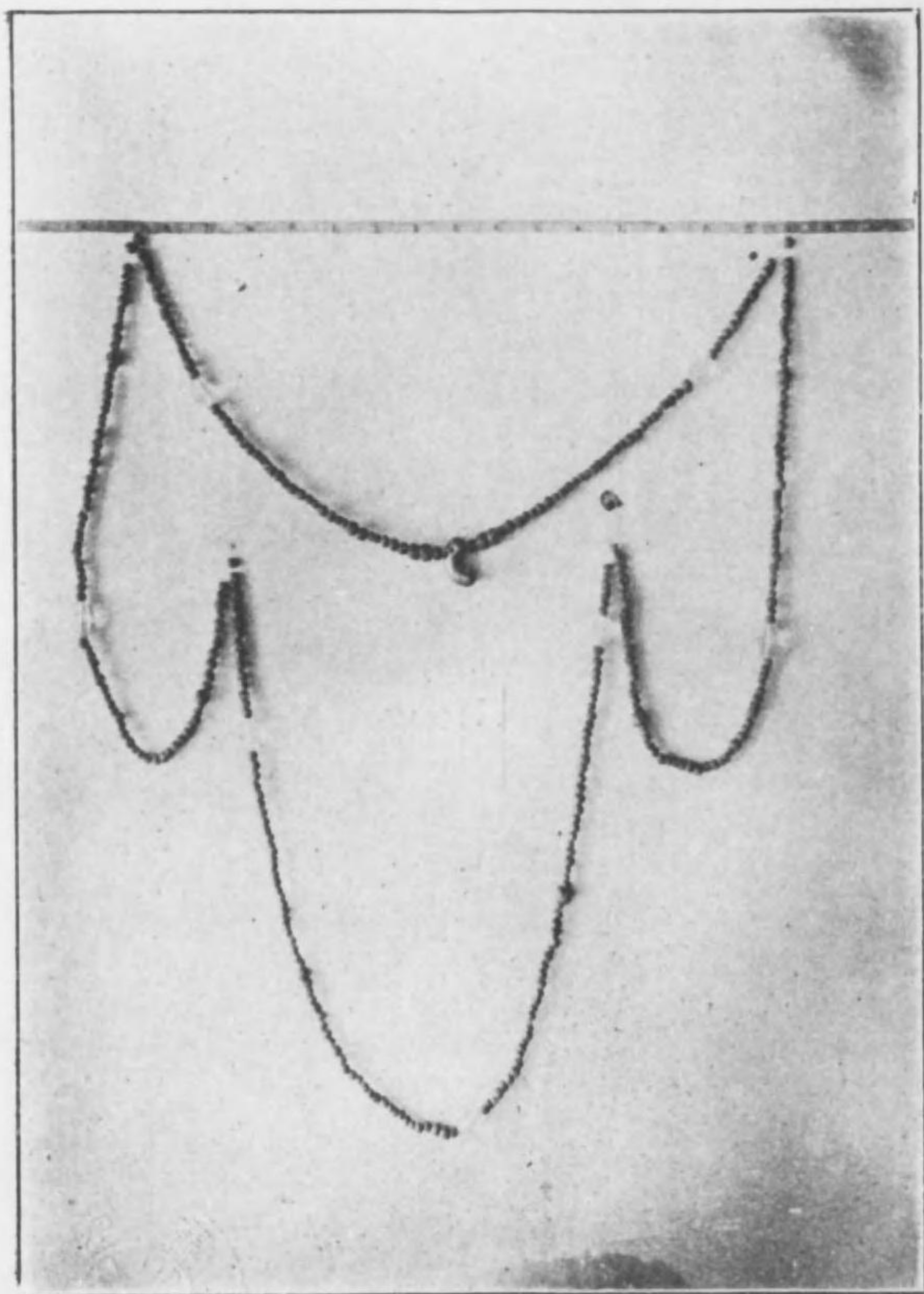
獸帶鏡。佐賀村大字佐賀小字森ノ下白鳥神社々地古墳發掘
甲(第四圖版)



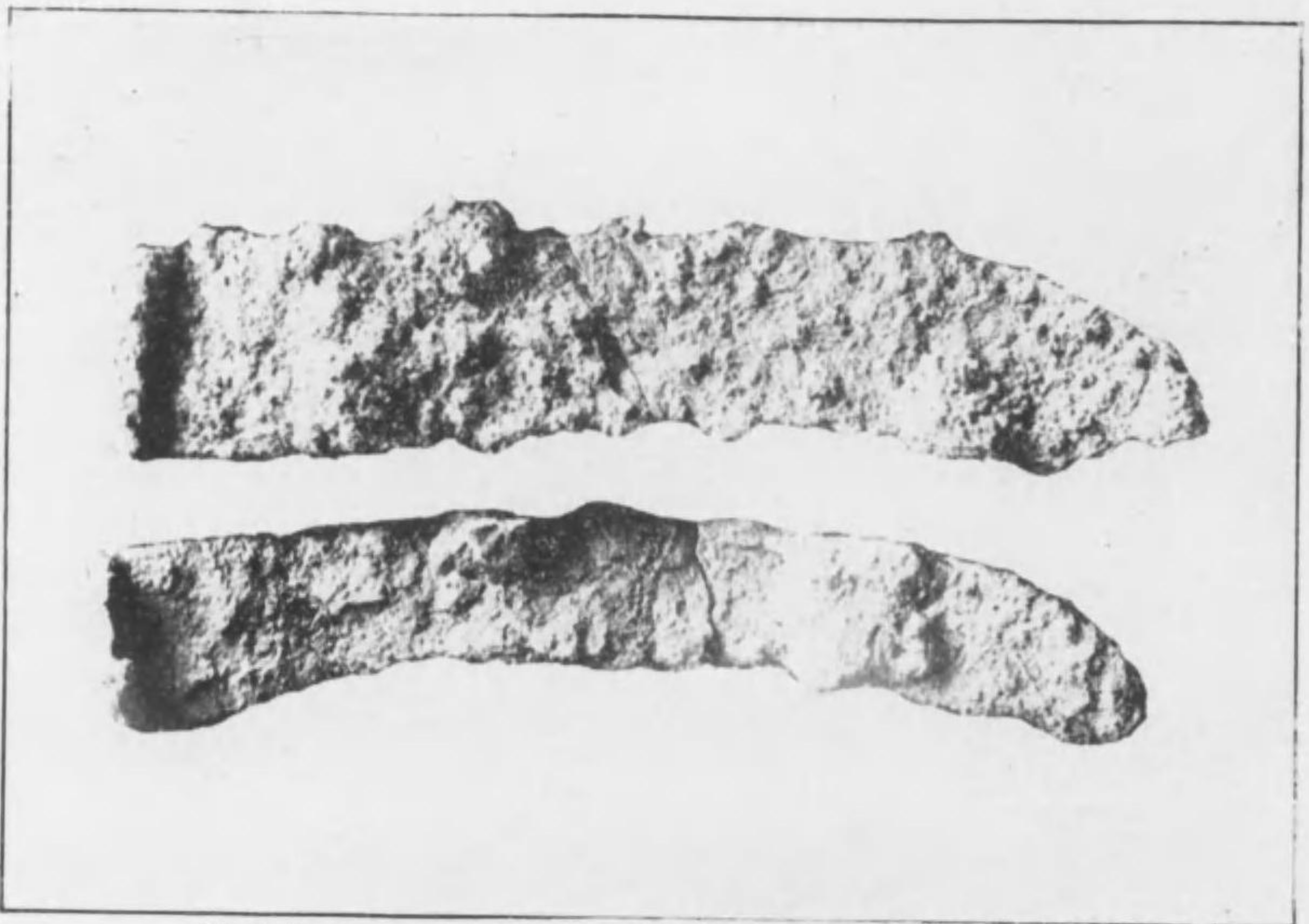
神獸鏡。
佐賀村大字佐賀小字森ノ下白鳥神社々地古墳發掘
乙(第五圖版)



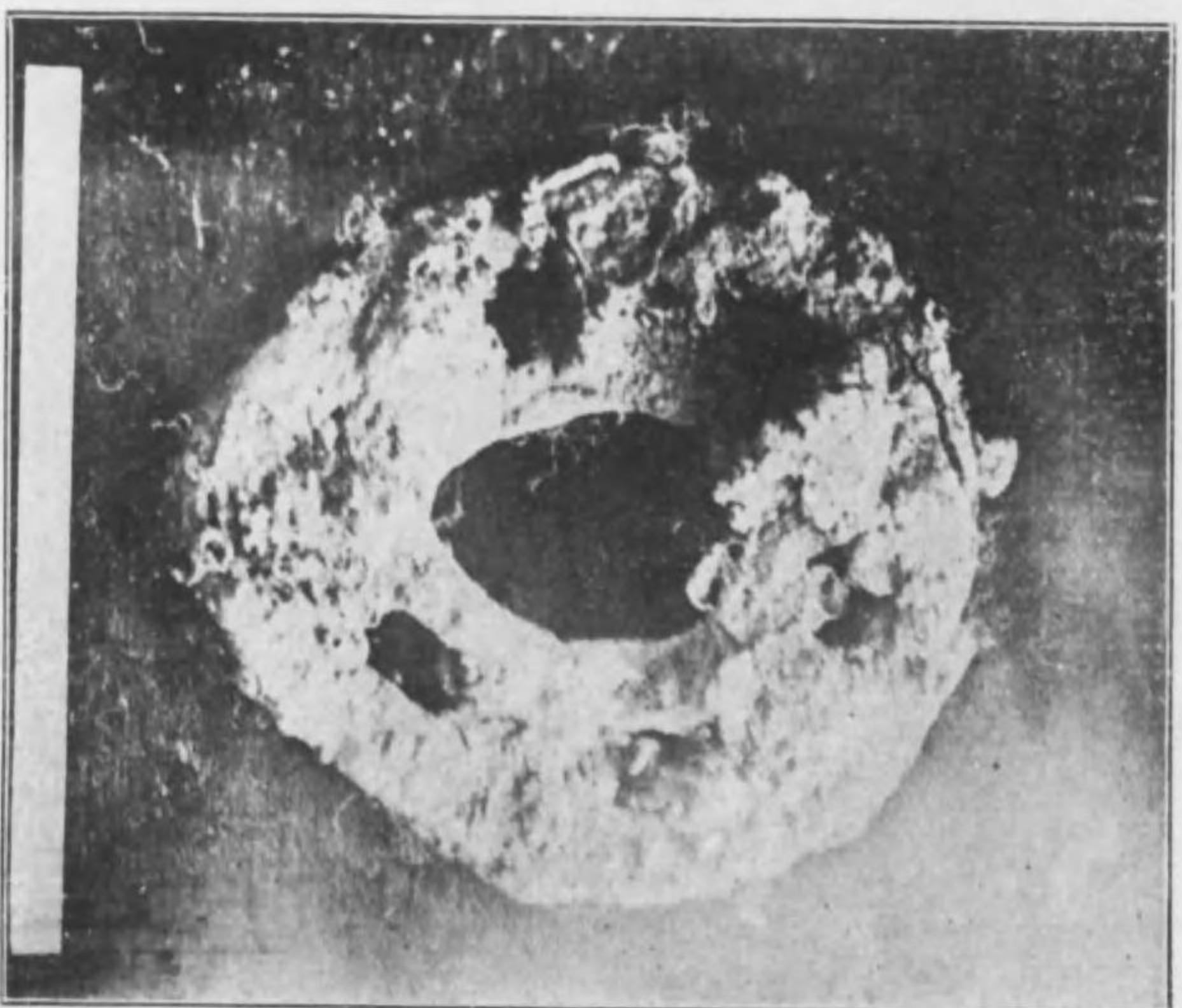
介殼入碗形齊瓮。城南村大字宿井小字後井古墳發掘（第六圖版）



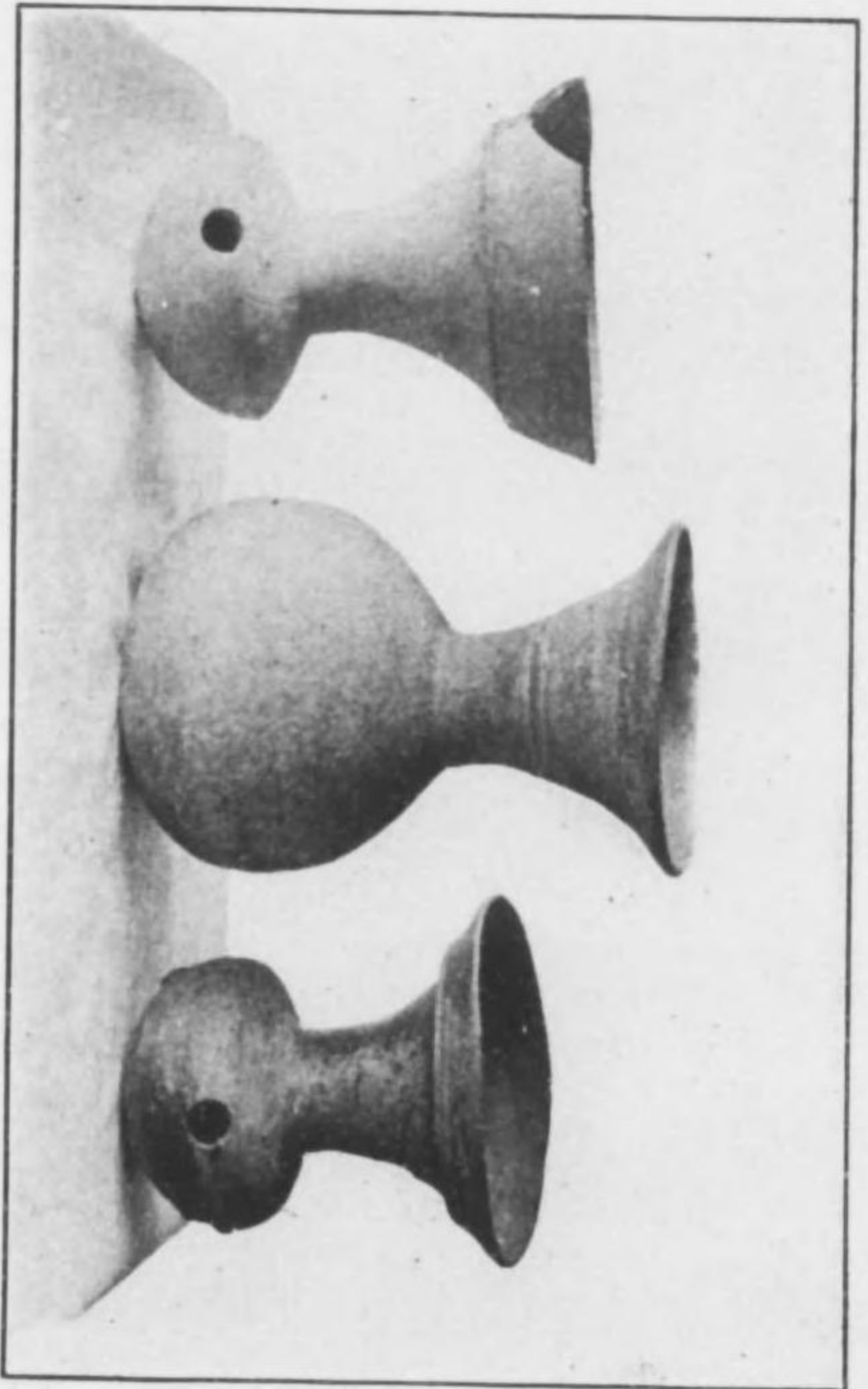
玉類。城南村大字宿井小字後井古墳發掘（第七圖版）



鎌。(1)城南村大字宿井小字後井古墳發掘 (第九圖版)
 (2)田布施町大字波野字御藏戸小字キツネビラ古墳發掘 (第九圖版)



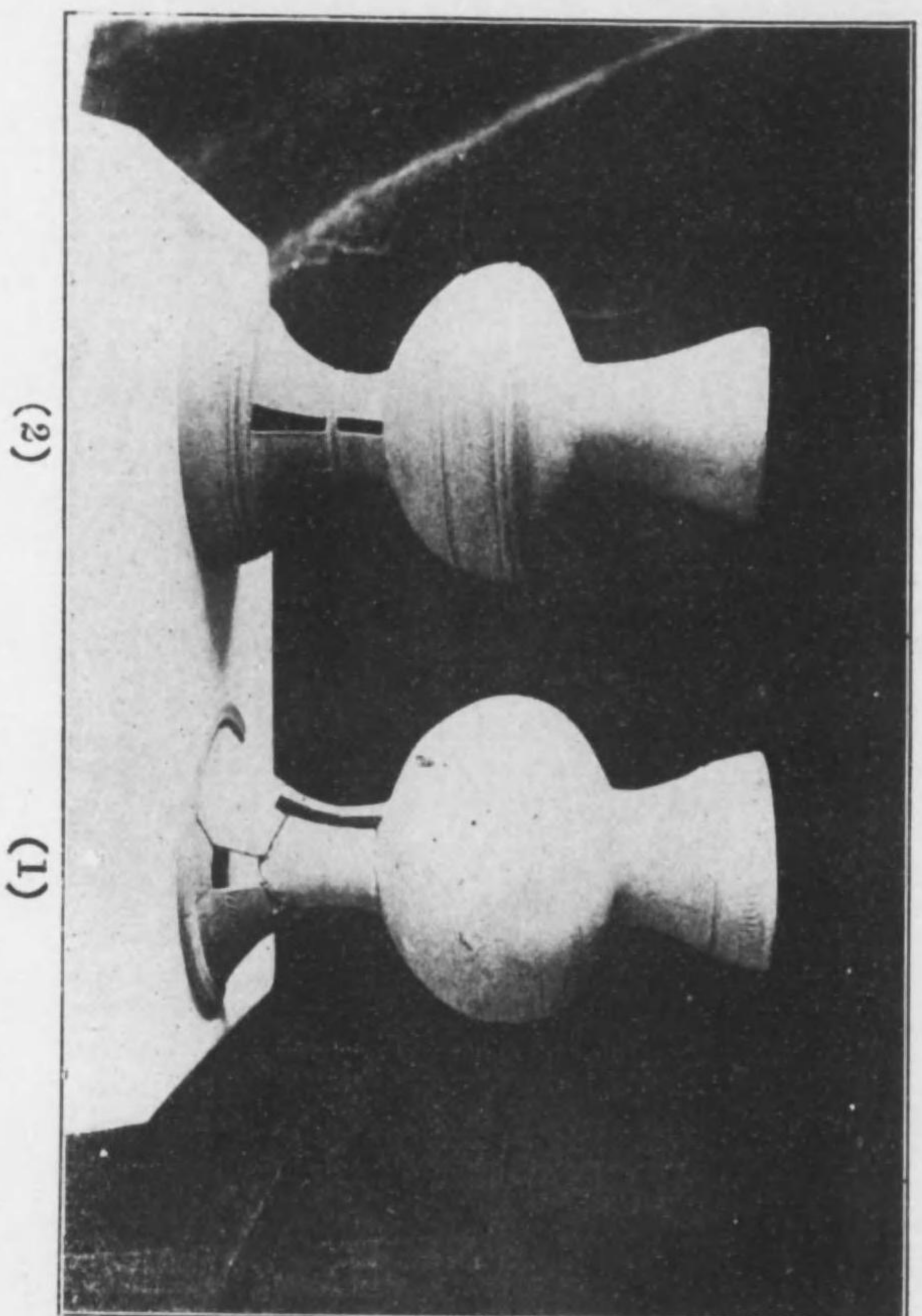
鐺。城南村大字宿井小字後井古墳發掘 (第八圖版)



吸 卮。
 (1) 城南村大字宿井小字後井古墳發掘
 (2) 城南村字吉井小字ヤクジノ古墳發掘
 (第十圖版)

墓附埴。

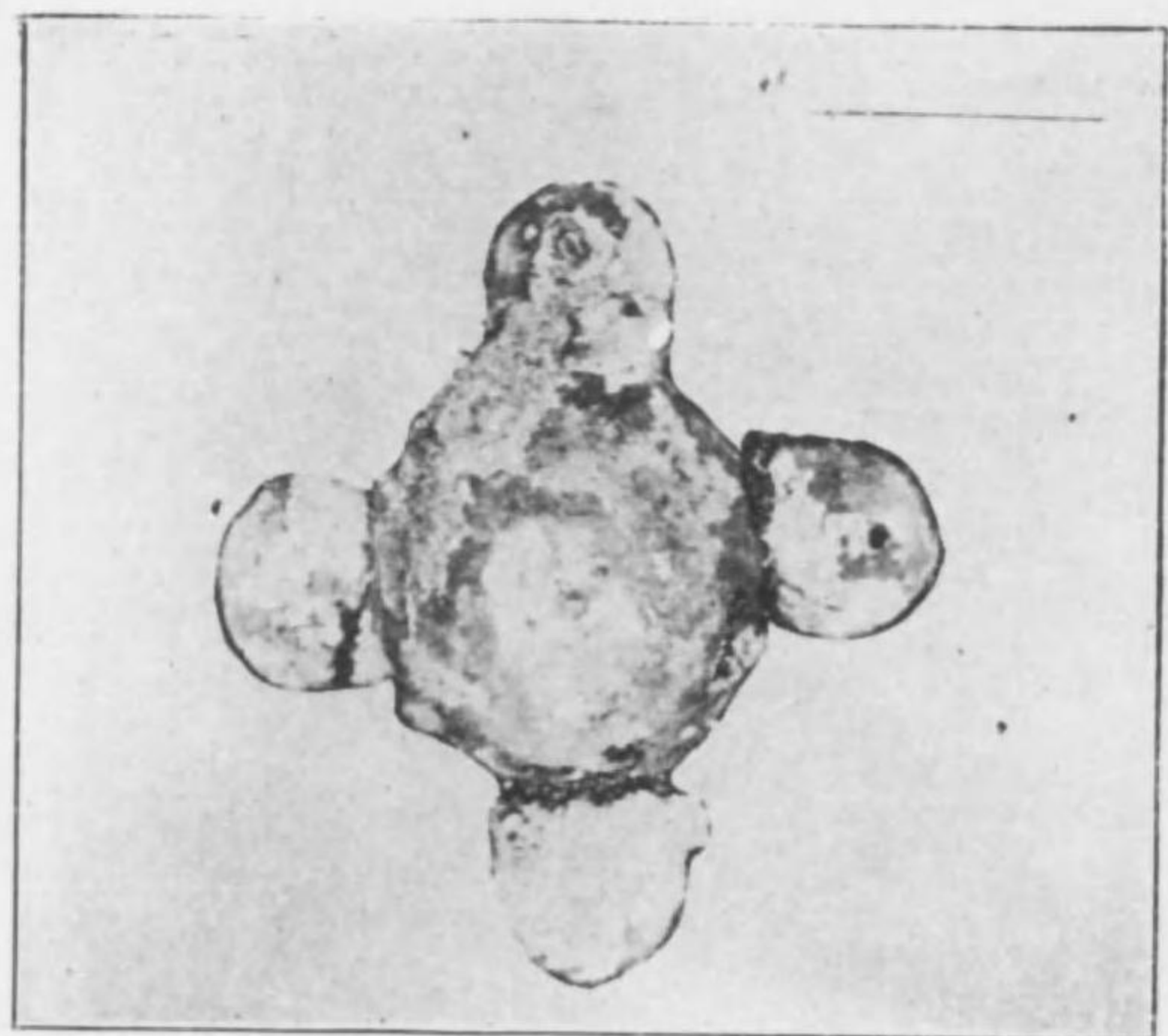
(1) 田布施町大字波野字御藏戸小字力善古墳發掘
(2) 城南村字宿井小字後井古墳發掘(第十一圖版)



鍍金製雲珠

城南村大字宿井小字後井古墳發掘

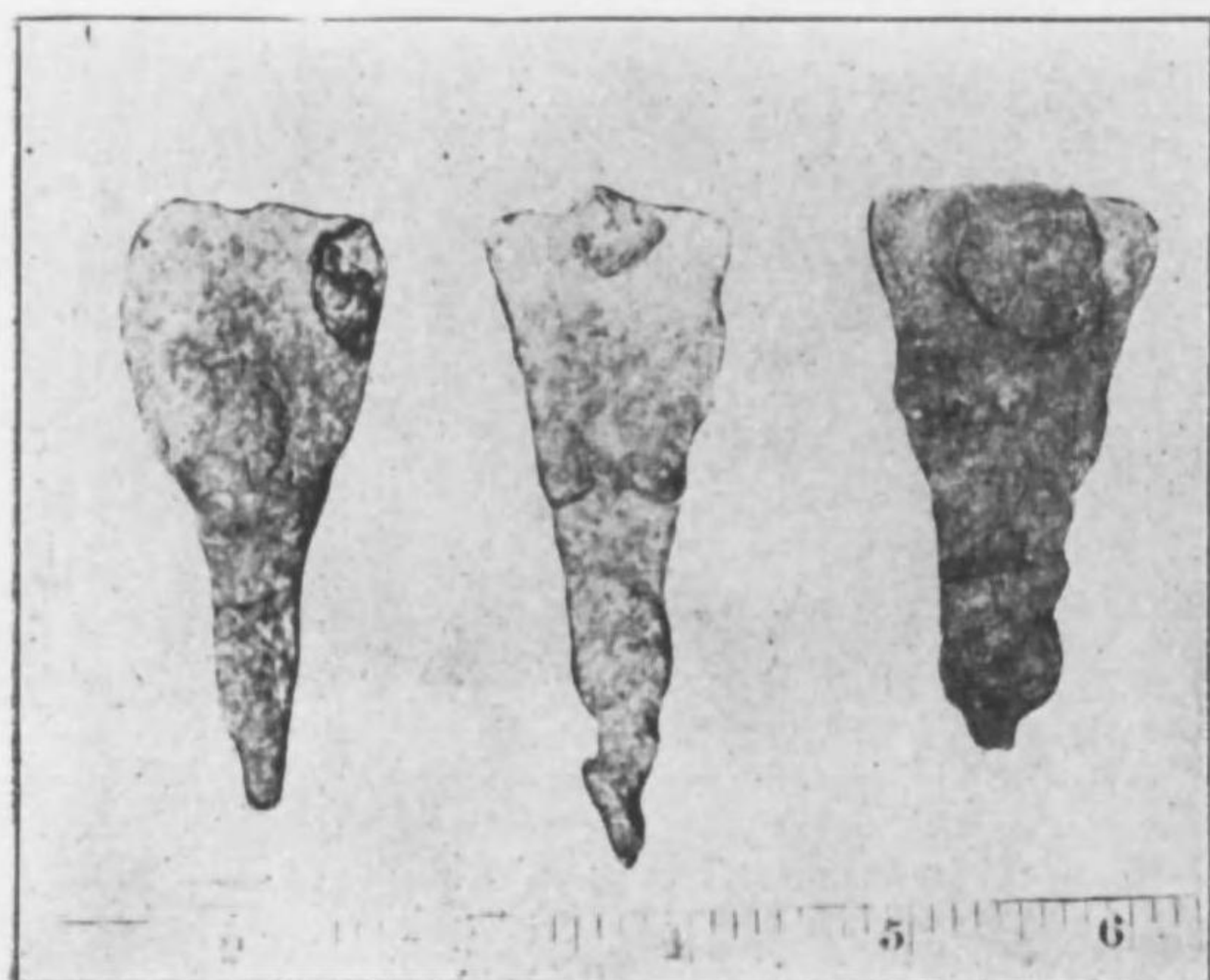
(第十二圖版)



鐵 鏃。

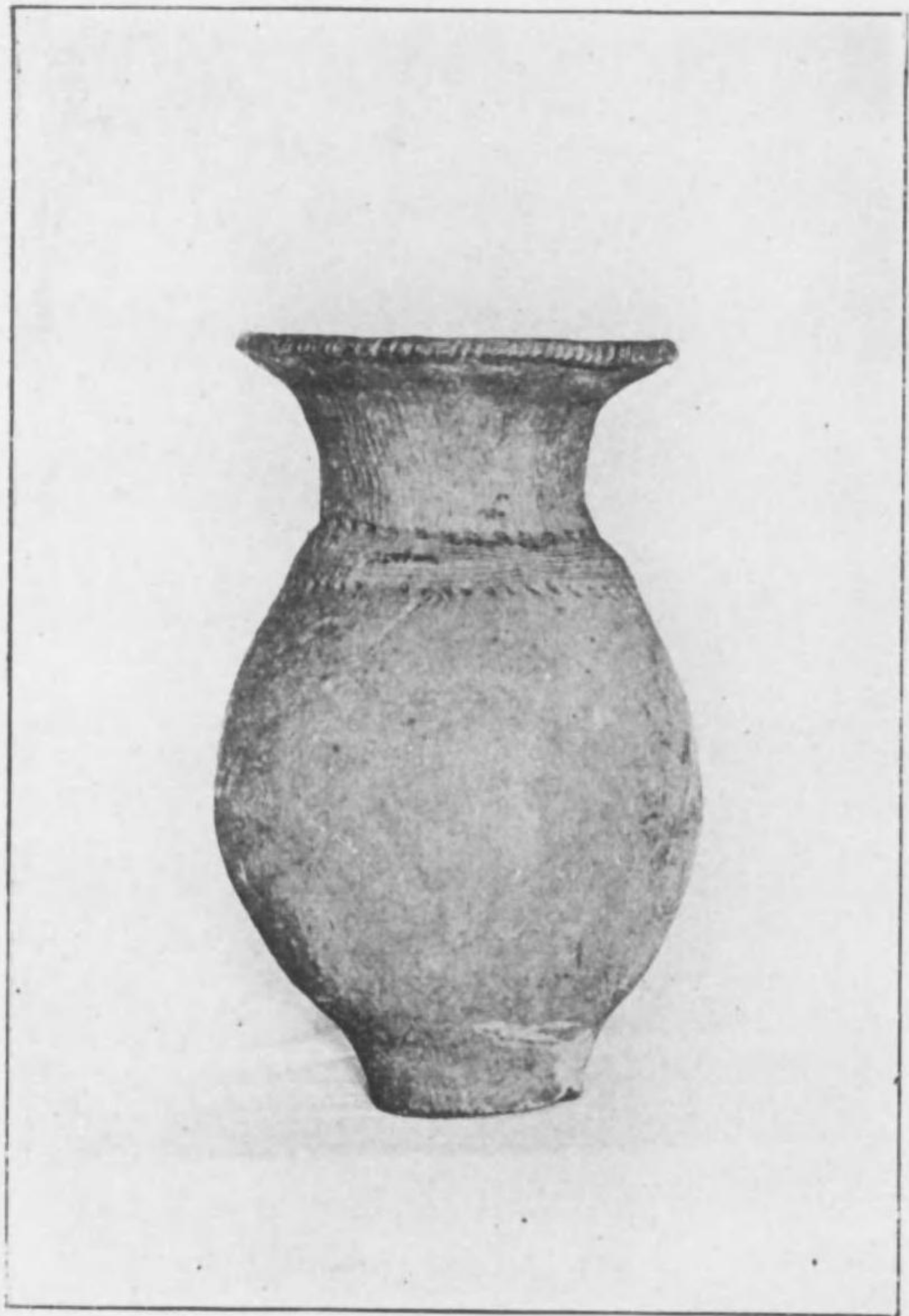
城南村大字宿井字御藏戸小字キツネビラ古墳發掘

(第十三圖版)



彌生式土器。

田布施町大字大波野字岩永小字奥之坊發掘



(第十四圖版)



高
坏。
 (1) 城南村大字宿井小字後井古墳發掘
 (2) 田布施町大字波野字御藏戸小字キツネビラ古墳發掘
 (3) 田布施町大字波野字御藏戸小字キツネビラ古墳發掘
 (第十五圖版)

土器

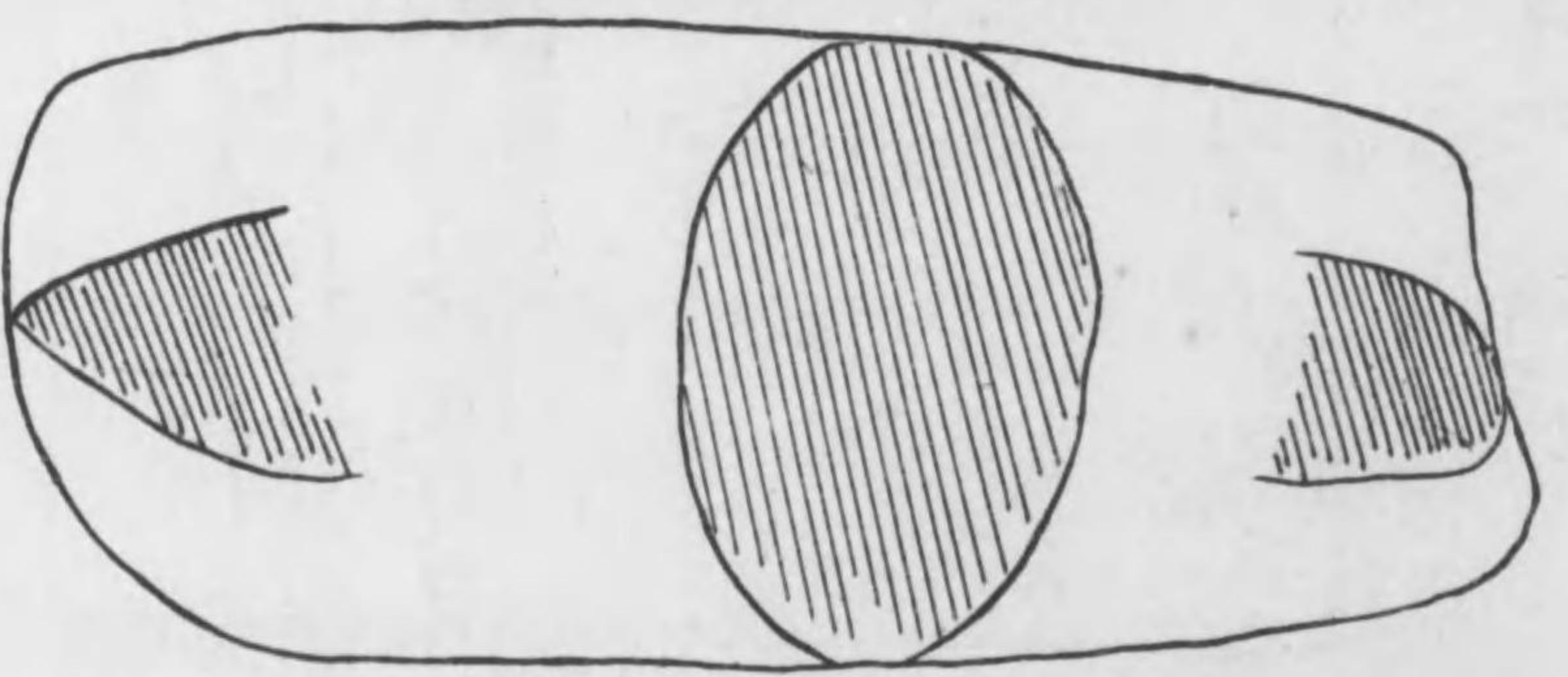


(3)(2)(1)
 (4)田田
 城布布
 南施施
 村町町
 大字大
 宿波野
 井字御
 小字藏
 後井戸
 古墳小
 發掘キ
 掘ツネ
 (第ビ
 十六ラ
 圖古
 版墳
 發
 掘)

(第十七圖版)

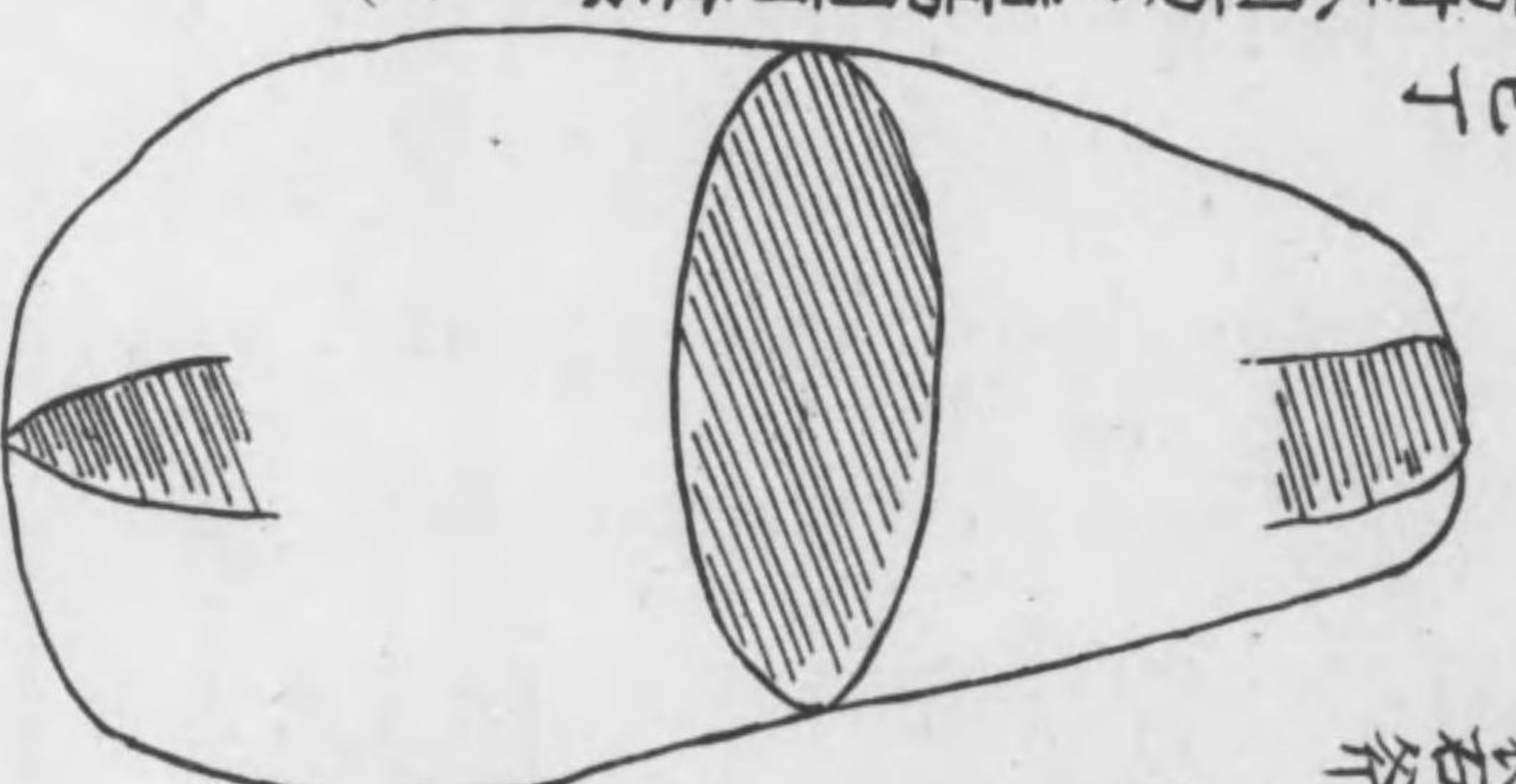
磨製石斧

田布施大字大波野小字上段發掘(1)



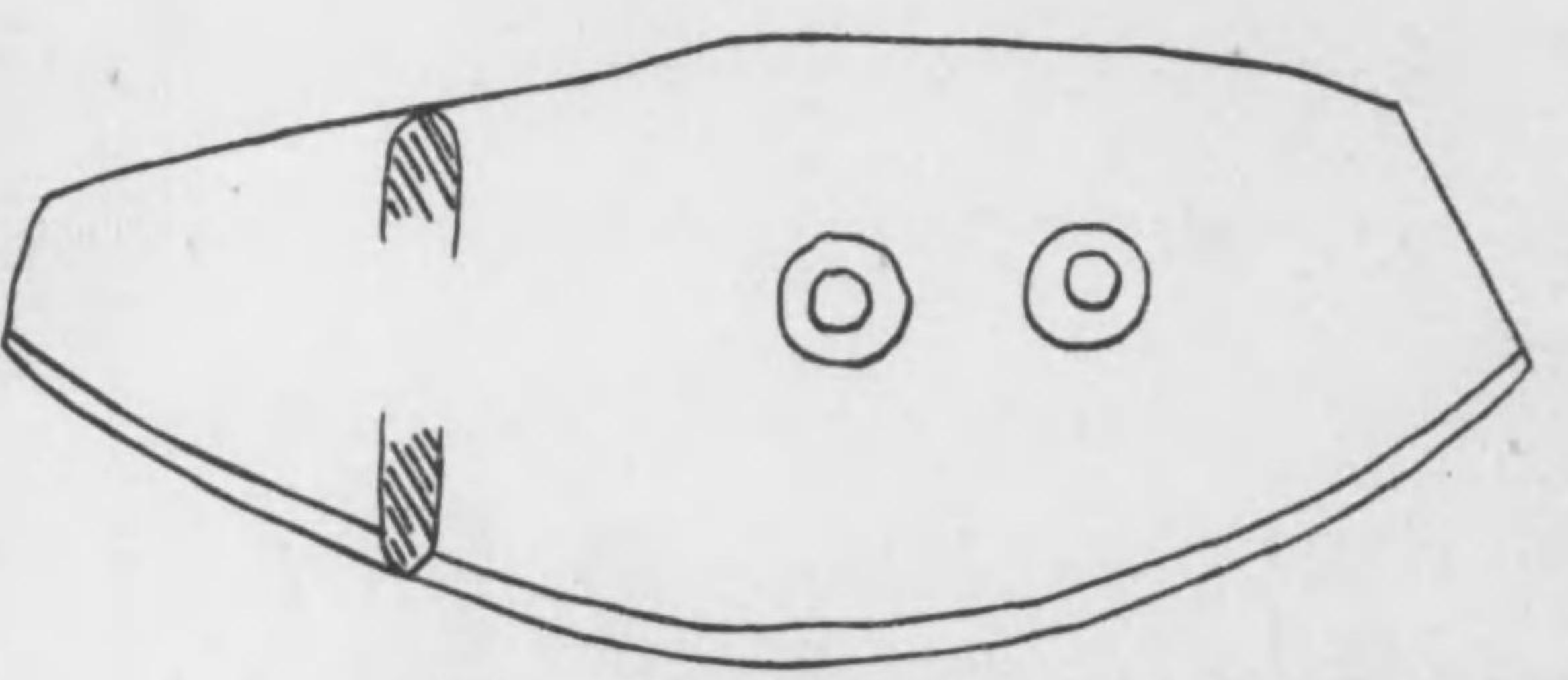
磨製石斧

田布施町大字大波野字明地發掘(2)



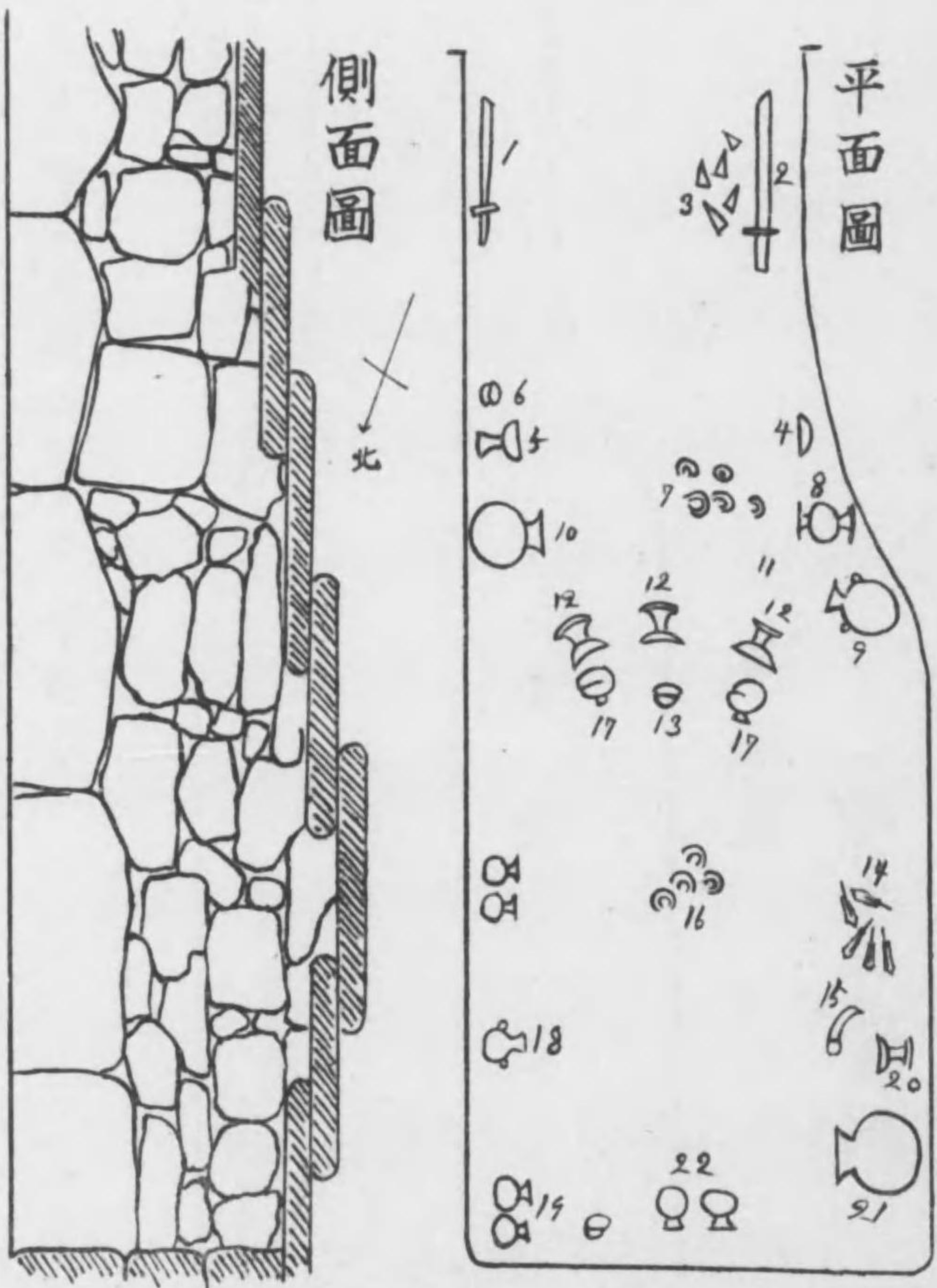
石包丁

周防村小周防小字道場門前發掘(3)



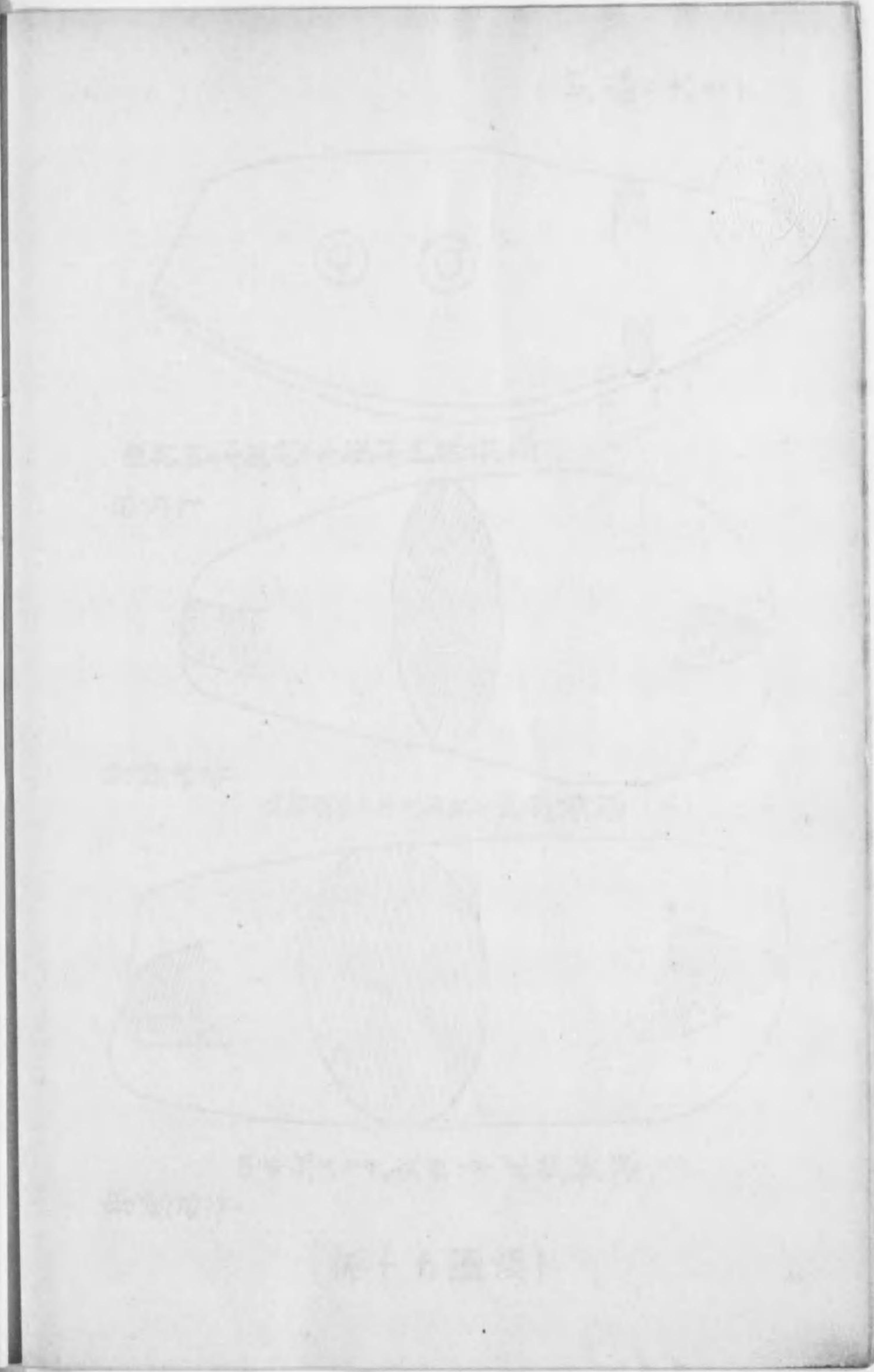
(現物の大さ)

田布施町大字波野字御藏口小字キツネビラ圖墳



古墳石擲内部遺物位置見取圖(四分之二)

(第十八圖版)



田布施町大字波野字御藏口小字力善古墳



平面圖

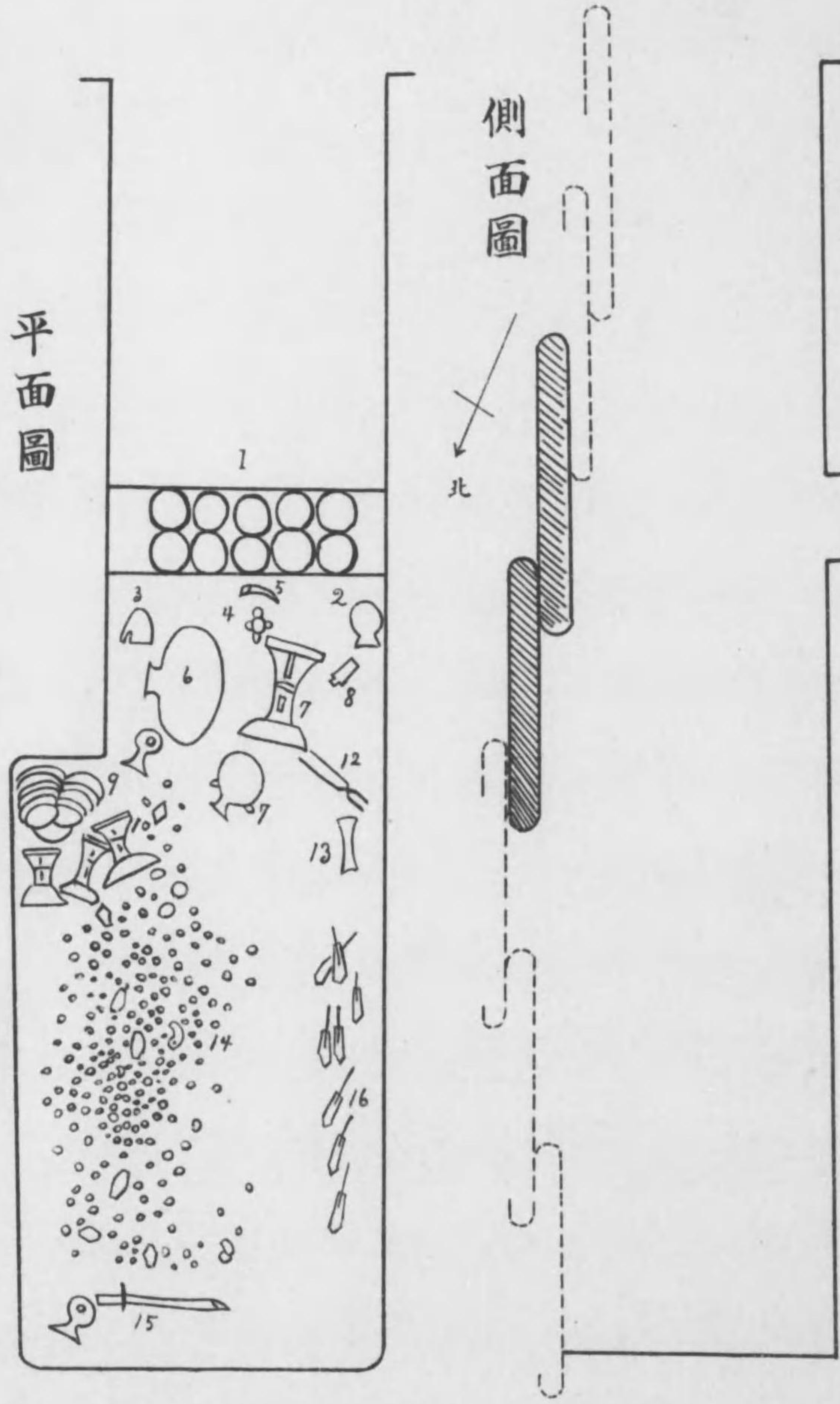
(第十九圖版)

古墳石擲内部遺物位置見取圖(三十分之一)



古墳石擲內部
遺物位置見取圖

城南村大字宿井小字後井(寺山)稱久(圓墳(四十分一))
(第二十圖版)



昭和二年十月一日印刷
昭和二年十月十日發行

(非賣品)

編輯者 弘津史文
山口縣山口町野田十五番地

發行者 山高郷土史研究會
山口高等學校歴史教室內

印刷人 平佐國介
山口縣山口町道場門前茶畑百十番地ノ十

印刷所 全上 大同印刷舍

337

473

終